

17

430

堀内新泉著

自彊術

東京

實業之日本社

引

人間は兩様あり一は日日自ら強めて息まざる人
 他の上は日日自ら吾身を弱くする所の人即ち是れ
 前者の人生に成功するに反して、後者の失敗す
 る原夫は此に在らんか。

付、歴なる英豪傑の大丈夫兒と雖も、勉めずしては天
 下世界に十事業をも爲し能ふ者にあらず。已に勉む
 る者とせば、力めて自ら強くする所なかるべからず。
 そは人間としては萬能の者なく、その性情に個個必ず
 欠陥を有す、欠陥はその人の弱點なり、弱點は勤勉を妨

31
 内空

害す。かかるが故にその欠陥を補足し、その弱點を強くせざるべからず、是れ自強術の起り來る所以也。世間に卓出する大丈夫兒すら、猶且欠陥を有し、弱點を有す、奚ぞ矧んや、平平凡凡たる尋常一様の人人に於てをや。その欠陥あり弱點あること固より怪しむに足らざる也。而も怪むに足らずとして已むべき者ならず、更にその性情の欠陥を補足し、その弱點を強くすること肝要也。さらばいかにしてその欠陥を補足すべき歟、曰く歴史に徴して古人の長所を探り、以て我が欠陥を補足し、或は格言訓戒の我に適する者を探りて、我

が欠陥を補足し、或は世人の言行に顧みて自ら訓練改善して我と吾身の欠陥を補足し、或は自ら發明頓悟して、我と吾身の欠陥を補足す、是れ皆我と吾身の弱點を我と吾身に自ら強くするの術ならずや。本篇は更にその間の消息を及ぶ、丈具體的に描出し、之を名けて自強術と云ふ。自強術は實に各人性情の欠陥を補足し、各人性僻の弱點を自ら強からしめ、以て各自天賦の責任を勉め、各自應分の事業を成就し、國家社會に貢獻せしめんとする老婆心たりと云ふを以て過言なりとせば、茲に新泉自ら之に依つて我と吾身を強

めんとする術を世間に發表し、敢て大方君子の示教を
請ふと云はんのみ。

明治四拾二年己酉春一月上澣

新泉識

例 言

- 一 本書は社會各方面の先輩に就きてその説を聞き、次は書と世と人
とに就きて、平素聊か余が讀み得たる所を記ししに過ぎず。
- 一 本書の或る部分は、外國の書籍若しくは雜誌より抄譯したるもの
も尠からず。

明治四拾二年一月吉日

新泉識

自彊術目次

一 人間に對する用意……………一

○我れは如何なる人物なるか……………二

○平生の言語舉動……………三

○人間學の眞髓……………五

○稀に満足する動物……………六

○絶望の人……………八

○殘酷なる部長……………九

○職務の人……………一〇

○水清ければ大魚少し……………一二

○無能！無能！……………一三

二

先づ細君の信用を得よ……………二〇

◎貴下は實に善くお稼ぎ成されています……………二二

◎言行の一致する人……………二四

◎泥棒根性……………二六

◎人間としての信用……………二七

◎おのれの妻の信用を得よ……………二八

◎彼の男は時隙を嚴守する人……………三一

◎絶望的境遇……………一三

◎憤怒の犠牲……………一五

◎無情な人間……………一七

◎同情すべき暴行者……………一八

◎誠實の人は獅子よりも強し……………二〇

三

賑な人と淋しい人……………三五

◎賑な人……………三五

◎淋しい人……………三六

◎春の日と冬の日……………三七

◎辭巧みにして誠少き人……………三八

◎金は元氣のパラメーター……………三九

◎今百万圓儲かつた！……………四〇

◎溜息モルレ……………四一

◎鼻唄モルレ……………四三

四

商人と着想(白髮富翁談)……………四四

五

感興湧出の時機

- ◎獨創的頭腦……………四五
- ◎おもひつき……………四五
- ◎イヤ其奴は旨い！……………四六
- ◎おもひつきの人……………四七
- ◎好い着想が浮んで着た……………四八
- ◎さあ何うしたのか……………五〇
- ◎二本の蠅叩……………五一
- ◎十日一水、五日一石……………五三
- ◎準備なき宿……………五四
- ◎熱心の別名……………五五
- ◎荒木探令君……………五五

六

獨立的人物と依頼的人物

- ◎君獨特の山水……………五六
- ◎天火が来た！……………五七
- ◎秋山の景色……………五九
- ◎神來の氣……………五九
- ◎天火一閃……………六〇
- ◎大なる教訓……………六二
- ◎下婢を叱る聲……………六三
- ◎自分でスグに茶を持つて来た……………六三
- ◎不快な態度……………六四
- ◎自己の力を頼む人……………六五
- ◎動物の慾望を強くせよ……………六六



- ◎ 社會の上座に坐すべき人……………六六
- ◎ 人生の戦争……………六八
- ◎ 社會の強者……………六九
- ◎ 遺憾千秋の紀念碑……………七〇
- ◎ 動物的慾望……………七一
- ◎ 人間としての價值……………七三
- ◎ 余は渾身精力なり……………七三
- ◎ 惡むべき人間……………七五
- ◎ 社會の凶賊……………七五
- ◎ 眞の道德家……………七六
- ◎ 邁往敢爲の人……………七七
- ◎ 實際的道德家……………七八



八

實業界の好戦士

- ◎ 猛烈なる生活力……………七九
- ◎ 人生の失敗者……………八〇
- ◎ 日常の戦争……………八一
- ◎ 銃と算盤……………八二
- ◎ 有効なる戦闘……………八三
- ◎ 軍隊の威力……………八四
- ◎ 勇士勇卒……………八四
- ◎ 好個の戦士……………八五
- ◎ 實戦者の手腕……………八七
- ◎ 實の持腐……………八八
- ◎ 是れ眞に不幸なる人……………八九

◎是れ眞に幸福なる人……………八九

◎怯夫弱卒……………八九

◎實業的事務家……………九一

◎實業界の好戦士……………九二

◎勇士猛卒……………九三

◎今日の青年事務家……………九四

◎實業界に於ける懦夫弱卒……………九五

◎好戦士の養成……………九七

九 余は花嫁に何事を語りし乎……………九八

◎細君の志望者……………九八

◎生活難の聲……………九九

◎處女の洗濯物……………一〇〇

十 商店繁榮の基礎……………一〇九

◎商家繁榮の工夫……………一〇九

◎時代の長所……………一一一

◎商賣上の競争……………一一一

◎これでも賣れぬか、これでも賣れぬか……………一二二

◎取扱の方法……………一二三

◎研究すべき一大問題……………一二四

◎實戦の勇士……………一二四

◎雇者被雇者の關係……………一二五

- ◎充分に繁榮せぬ重大なる原因……………一三七
- ◎商人の戦争……………一三八
- ◎熱烈勇敢なる部下……………一三〇
- ◎店主と一心同體の男……………一二一
- ◎昔の店員は武士的……………一二二
- ◎商業的良戦士……………一二三
- ◎誠實の念慮……………一二四
- ◎我が店舗の繁榮する時……………一二五
- ◎痛切なる窮乏……………一二六
- ◎商家繁榮の大秘訣……………一二六

十一 余が落魄せし原因……………一二七

- ◎運命の基礎……………一二七

- ◎身から出た錆……………一二八
- ◎彼の子は今に偉い者になる……………一三〇
- ◎身を滅ぼす原因……………一三一
- ◎第一の缺點……………一三三
- ◎小才の利く人間程危険な者は無い……………一三四
- ◎おれは偉いぞ……………一三五
- ◎我が今日を來す道火……………一三六
- ◎精神的失敗者……………一三七
- ◎立脚の基礎……………一三八
- ◎自家の天福……………一三九
- ◎辯護士事務所……………一四〇
- ◎人に取入る一種の秘訣……………一四二

十二

實質的人物

- ◎一萬五千圓といふ大金の報酬……………一四三
- ◎黄金時代……………一四五
- ◎肝腎な職業は其處のけ……………一四五
- ◎委托金費消費……………一四六
- ◎酒色に身を持崩した崇……………一四六
- ◎非實質的人物……………一四九
- ◎價值ある實質……………一五一
- ◎立身的捷徑……………一五三
- ◎自治自造の功……………一五五
- ◎青年の修養法……………一五六
- ◎學科は第二で第一は品性だ……………一五七

十三

美妻の中毒

- ◎バケの皮が現はれる……………一五八
- ◎その主なる原因……………一五九
- ◎美妻の中毒……………一六〇
- ◎青年の三大慾望……………一六一
- ◎美妻の價值……………一六二
- ◎青年法學士……………一六二
- ◎大頭に睨まれた！……………一六三
- ◎いよ／＼見所がある！……………一六四
- ◎戀の病……………一六五
- ◎妖艶花の如き新婦……………一六六
- ◎美女の魔力……………一六七
- ◎これ以上の望はなし！……………一六八

十四 自己の改善法

- ◎美しい生娘……………一六九
- ◎イヤ此奴は大變だ！……………一七一
- ◎活動的銳氣……………一七二
- ◎美人萬能主義……………一七二
- ◎自己の改善法……………一七三
- ◎價值ある人……………一七三
- ◎人格の修養……………一七四
- ◎天才の人……………一七五
- ◎如何なる個所を改むべきか……………一七五
- ◎立身の要素……………一七六
- ◎誠實なる精神……………一七七
- ◎將來の運命……………一七九

- ◎最も大切なる立身の要素……………一七九
- ◎一個の完全なる人……………一八〇
- ◎我れは常に誠實なるや否や……………一八一
- ◎虚偽の行爲……………一八二
- ◎黄金的青年……………一八三
- ◎惡癖を有する青年……………一八四
- ◎人間の埋木……………一八五
- ◎自己改善法……………一八六
- ◎彼奴は何んだかいやな奴だ！……………一八六
- ◎利己主義の人……………一八九
- ◎重大なる弱味……………一九〇
- ◎此奴中使へるわい！……………一九二

十五

金錢より見たる人間

- ◎驚くべき大酒家……………一九二
- ◎事業一偏の人……………一九四
- ◎有数なる一大事業家……………一九五
- ◎立身の階段……………一九五
- ◎人間程横着な者はない！……………一九七
- ◎人物鑑識法……………二〇一
- ◎金が金をつくる……………二〇二
- ◎世の中に生れたは何の爲か……………二〇四
- ◎庫中の死物……………二〇五
- ◎逆つて入る物は又逆つて出づ……………二〇六
- ◎如何なる人を心から愛するか……………二〇七

十六

事業と準備

- ◎一も金！二も金！金でなければ夜があけぬ……………二〇七
- ◎金錢とは如何なるものか……………二〇八
- ◎貧より辛いものはない！……………二〇八
- ◎商界の大波濤……………二〇九
- ◎商業家として世に立つ資格……………二一〇
- ◎好景氣の時代を迎ふる大準備……………二一一
- ◎泥捧の顔を見て繩を縛ふ人……………二二〇
- ◎不景氣を活用せよ……………二二三
- ◎好景氣の前身……………二二五
- ◎一生の不景氣……………二二五
- ◎複雑な所に味がある！……………二二五

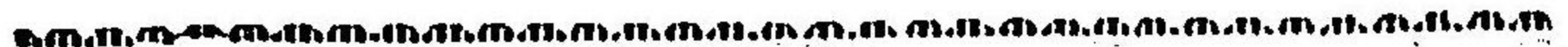
十七

- ◎黄金時代……………二二七
- ◎景氣の好い人……………二二八
- ヨシ来た！……………二二八
- ◎準備の人……………二二九
- ◎失敗勝の人……………二二二
- ◎非常なる大準備……………二二三
- ◎『ヨシ来た！』……………二二三
- ◎ヨシ来たの名人……………二二四
- ◎彼の偉大なる所以……………二二四
- ◎眞智眞勇の人……………二二七
- ◎さあ来るなら来て見ろ！……………二二九
- ◎第二の『ヨシ来た！』……………二三二

十八

妻としての美人

- ◎渾身元氣の人……………二三一
- ◎無類飛切……………二三〇
- ◎妻として能く任務に堪ふる資格……………二二三
- ◎彼の女の眞價……………二三五
- ◎美人は概して無能である……………二三五
- ◎家庭の女王……………二三六
- ◎顔に惚れて貰つた細君……………二三七
- ◎細君の標準點……………二三八
- ◎妻として美人の價値……………二三九
- ◎幸福なる家庭……………二三九
- ◎愛情の方面……………二四〇



十九

- ◎夫婦の情合……………二四一
- ◎花は一時で實は大切……………二四一
- ◎五十年の不作……………二四二
- ◎最も信頼すべき朋友……………二四三
- 斯るが故に余は遇人なり……………二四四
- ◎彼れは能く場合を見る……………二四四
- ◎智と經驗とに富んだ人……………二四五
- ◎不斷の用意……………二四六
- ◎成業の要訣……………二四七
- ◎人生の真趣……………二四八
- ◎場合なるかな……………二四九
- ◎櫻は最う散つた……………二五〇



二十

- ◎爰が智者の勝い所……………二五一
- ◎事の難易大小……………二五二
- ◎骨折損の草臥もうけ……………二五〇
- ◎賢愚の差別……………二五三
- ◎相當の時と力……………二五四
- ◎智者は樂み愚人は徒らに憂ふ……………二五五
- 職業に對する勇氣……………二五五
- ◎心の張の強い人……………二五六
- ◎自家の職業に對する勇氣……………二五六
- ◎醫士の勇氣……………二五九
- ◎軍人の勇氣……………二六〇
- ◎航海者の勇氣……………二六一

- ◎自家の職業に對する勇氣なき人……………二六〇
- ◎善良なる事業……………二六三
- ◎價值ある事業の前身……………二六四
- ◎大勇猛心ある人……………二六五
- ◎事業の人……………二六六
- ◎事は氣を以て成る……………二六八
- ◎勇氣の比較競争時代……………二六九
- ◎赤藥罐を見たやうな男……………二七一
- ◎血氣の勇……………二七一

自彊術目次終

堀内新泉 著

自彊術



人間に對する用意

隱者仙人の類ならば格別、苟くも人間界の飯を食つて居るものは、一日として人に接せざれば居られない。換言すれば人は人に依つて生きて居るもので、假令、何んな大人物であつても、否、大人物なれば大人物なる丈、孤獨では何事も出来るものでない。即ち何うしても、人は人に接しなければ、この世は飯の食へないやうに出来て居る。殊に實業家などは左様であらう。

單に人に會つて談話をしたり、又は交際すると一口に言つて了へば、これは日常何人も皆各自に遣つて居る事、その爲別に何んの用意も工夫も要らぬやうなもの、さて瞑想一番して見たならば、おそらく世の中にこれ程むづかしい事はあるまい。

◎我れは如何なる人物なるか

早い話が、その人の話振や、その人の行爲には、その人の人物如何が、おのづから見はれて、
といふことを直ちに人に看取せられる。重言すれば、その人の一言一行は、皆是れ悉く其の人の人格の分身と見て差支はない。論より證據、人格の高潔な人であれば、その言語も行爲も、おのづから立派であるが、人格の下劣な奴であれば、その言語舉動も亦直ちに賤陋浮薄である。

平氣で居ればそれまでだが、仔細に注意する時は、英雄には英雄的言語態度あり、怯者には怯者の言語舉動あり、智者には智者的言語動作あり、愚者には愚者的言語行爲あり、人ありこれを辨ずるに及ばず、各自皆その言語行爲に依つて我れは英雄たり、我れは怯者たり、我れは智者たり、また愚者たることを明かに自白する。
されば完全なる人(少くも完全に近き人)として世の中に立たうといふには、平素人に接する上に於いて、我が

◎平生の言語舉動

に精細なる注意を拂はなければ成らぬ。即ち平素人に對する用意を備へて居なければ、僅の失言失體よりして、大いに自己の品位を毀損するやうな場合があるであらう。人に對する用意のない人は、何人に對

しても、概して場合を見ずにものをいふ。例へば婚禮の席で念佛を申し、葬禮の席で歌を歌ふやうな事をして人に甚だしい悪感を與へるの
 は得て斯んな人に多いのだ。
 世には一廉の力量を備へて、これならば何處に出ても立派に口の利ける
 といふ人でも、何うかすると、人に對する用意を缺いて居る人も世間
 に全く無いてない。初めから價値のない人であれば左様でもないが、
 他の方面には十分の價値ある人で、斯ういふ缺點を自ら造つて、人に兎
 角批判されるなどは、實に惜しいものである。單に人の批判に止まる
 丈ならば、關はぬが、僅かなる不注意よりして、直ちに人の怨を受け、若し
 くは己れの人格を疑はれるなどは、誠に不利益千萬な話である。
 これ等の人に就いて或る人はいふ。「昔人の長上とも成つた人は、部下
 の士に敬はれ懷かれたものだといふが、今日人の上に立つて居る人に

は、部下の人より甚だしく怨まれ、若くは厭はれるやうな人が多い」と。
 この言果して眞なりや否や、世事に疎い我等には分らぬが、『徳を以て
 すれば人服し、威を以てすれば人反く』といふ先哲の訓言は、この世の存
 在せん限り、何時も生血を含んで居るであらう。人の上にも立たう
 といふやうな人は、世に通じ事に通ずると共に、又大いに、

◎人間學の眞髓

にも通達して居なければ成らぬ。他の事には明るくても、人間學に精
 通せぬ人は、おそらく失敗するであらう。また他の事には左程曉通し
 て居なくても、能く人間學に達して居る人は、おそらく人間の事業に成
 功するであらう。何んとなれば、政治にもあれ、實業にもあれ、世の一切
 の事業の相手は人間である。ここを思はず、ただ己れの手腕のみを以

て事を成さんとした人は、古來英雄などと謂はれた程の人物中にも、ひとり其の事業に失敗したばかりでなく、その爲自家の生命まで棒に振つた人が少くない。况んや凡人に少し毛の生へた位の人物では、個中の消息に就いて、大いに猛省しなければ成らぬ。人間は能く怒り能く怨み而して甚だ

◎稀に満足する動物

である。ここにトクと眼を止めず、愨に己れの威力位を以て、彼等を壓服しやうとすると、その結果は實に飛んでもない事に成るであらう。傳へ聞く某の會社の部長某氏は、身體強壯、意志鐵石、加ふるに博學多才の士にして、近頃評判者の事業家であつた。この人の部下に某といふ正直にして勤勉なる男があつた。彼は一日のことに始めて一時間ば

かり遅刻して出勤し、

『部長誠に申しかねましたが、今日一日丈何うか休ませて頂きたいものです！』

『何ういふ理由で君は休む？』

『小供が太く病つて居りますので、實は今日は無届で休ませて頂かうかとも思つたんですが、いかに我が子の大病だと云つても、それでは職務に對して濟まぬと思つて、態も届けに上つた次第です！』

『それは御念の入つたことだ、一日位は何うでも宜しい、まあ精精大切に看護し給へ』

この時部長は唯一言斯う云つたならば、彼の部下は何んなにか喜んでであらう。けれども彼は人に對する用意のない男であつた。一方の切なる願を聞きも終らず、

『小供が病つて居るからと云つて、今は一番社の多忙しい時だ！君のやうな人間の目には見えぬかも知らんが、今は一日誰に休まれても困る、そんな呑氣な事を云はずと、君もこの社の飯を食つて居る人間だらう、さつさと事務に就き給へ！』

餘りだとは思つたが、上に向いて唾は吐かれぬ。泣泣一日事務を執つて、暮方家に歸つて見ると、醫士の手當も其の甲斐なく、悲しや我が最愛の一人子は、今息を引取つたといふ所であつた。父なる人は慟哭した。その爲一時は氣を取亂して、

◎絶望の人

に成つた。殘忍なる部長に對する彼の怨みが無からうが。

『ア、昨日早く歸つて来て、最少し良い醫者に早く診察して貰つて、十分

手當をして遣つたならば、假令本服はせぬまでも、斯う早くは死にはしなかつたらうものを、彼の部長め、アンマリ酷い！』

翌日泣泣葬儀を營んだ。その翌日はモウ社に出勤しなければ成らぬ。けれども彼は考へた。

『何うしやう、最う罷めやうか。彼んな

◎残酷なる部長

の下に立つて働くのはいやだ！糞ッ、後は何う成らうと關らものか罷しちまへ！』

一度は斯うも決心したが、それでも會社をやめて了へば、スグに衣食に困るのが目の前に見えて居る。仕方がないので涙を吞んで、その翌日出勤して、部長に昨日缺勤した理由を口頭で届けると、彼は大いに同情

して、

『それはまあ氣の毒な事だつた！ 嘸かし御愁傷だらう、お察し申す！ 御承知の通り何分忙しい時なんで、昨日は少し言ひ過ぎたかも知らんが、まあ何うかゆるしてくれ給へ！』

口に税はかかりはせぬ。ちよつと一言斯う云つて慰めたならば、彼は大いに喜んで、直ちに又勤勉實直なる

◎職務の人

に復したであらう。他の一切には勉強でも、肝腎な人間に就いての研究には不勉強であつた部長は、この不幸なる人に對して、唯一言の見舞も云はぬばかりでなく、

『君達は小供の死んだ位に一日も、大事な職務を顧みんだらうか、そんな

ケチな了簡ぢや、到底も世の中は旨く働けん！ さあ愚圖愚圖して居らんで、早速事務を執り給へ！』

この無情なる一言に依つて、彼は再び部長に對して深く怨んだ。彼は子を亡つた悲みと、慘酷なる部長の言行に對する怨みの念に氣を奪られて、手と心とが別別に成つて居るので、我れながら不思議な程、その日は事務が擧らなかつた。然るにこの社の部長といふ人は、實に非常な敏腕家で、精力家で、加ふるに感情の猛烈な男であつた。朝は衆に先んじて出勤し、夕方は一同の退出した後まで残つて居て、誰それは今日何丈の仕事をしたと云ふことまでチャンと調査しなければ氣が濟まぬといふ氣質。それで事務の擧り方は何うだといふと、當人はまだ其處に氣が附かぬと見えるが、兎角世の中は、

と云つたやうに、部長その人が部下の一舉一動に就いて、その遣り目が餘りに酷烈極まるので、所謂過ぎたるは及ばざるが如しといふ結果に陥り、その爲部下の怨みを買つて、思ふ程には何うも結果が擧らぬので、彼は常に口癖のやうに、我が大切なる部下の士を、

◎水清ければ大魚少し

◎無能！無能！

と盛んに罵倒して居つた。それは先づそれとして、我が最愛の一人子を亡つた上に、部長に散散辛く當られた某氏は、何んとなく世を果敢なむ心が起つて、その翌日は何うしても出勤する氣に成れなかつた。部長の方では、場合も事情も容赦はない、前日某氏の働振が意に満たなか

つたので、明日も亦斯うであつたら、ウシと膏を取つてやらうと待構へて居つた。彼にして若し、人間は如何なるものなるかを正しく解釋して居つたならば、この時決して斯んな考へは起さなかつたであらうが、他の學問には博く精通して居つても、人間學には無學であつた右の部長が場合も事情も考へずにこんな荒荒しい考へを起したのは、自ら好き好んで爆烈丸を撃がんとするやうなものであつた。何んとなれば人間は、兎もすれば人を怨み、僅の事にも甚だしく憤るものである。特に

◎絶望的境遇

にても打附かつて居る様な時は、前後の分別を飛離れて、何んな無法な事でも遣りかねぬものだ。中にも注意すべきは、子を亡つた人に對す

る用意である。凡そ世の中に何が悲しいとか苦しいとか云つても、我等人間に對して人生無上の悲哀と苦痛とを與へる者は我が子の死んだ時である。我が愛子を亡つた場合には、世に偉人などと言はれた人々でさへ發狂して居る。その實例は内外の史上にいくらも見えて居る。偉人にして然り、況んや是れを凡人にしては、我が愛子を俄に奪らるれば、何人もその常座は發狂して、金も名譽も一時は全く我が念頭を去つて了ふ。斯くの如き人に對する場合には、此方の一言一行に就いて大いに注意を拂はぬと、實に飛んだ事になる。彼の部下の一人は今や丁度その場合に臨んで居たのであつた。その翌日は既に出勤すまいかと思つたが、生活に追はれて居る身の悲しさには左様も行かぬ。おもひ直して、眼を閉つて出勤はして見たが、殘忍酷烈なる部長の顔を見ては、『彼奴は我が子の敵だ』といふやうな氣がして、何うしても何時も

のやうな勤勉家として熱心に事務を執る譯に行かぬ。これでは成らぬと、彼は幾度か氣を取直し、以前のやうに忠實に事務を執らうとして見ても、心は何時しか部長を怨み、我が幼兒の死を悲しむ餘り、兎もすれば手を空しうして居ると、部長はツカ／＼その男の傍に近寄つて、『君は何が不平で熱心に事務を執らんのだ？ 我輩の命令に服従せぬやうなら、今日から早速退社して貰はう、本社には未だ君の如き怠惰漢に空しく飯を食して置く餘裕はない！』
人は何處までも弱い者だとのみ思つて居ると、それは太した間違である。或る場合には虎の前に縮んだ兎よりも意氣地がないが、男が一度萬事を

◎憤怒の犠牲

に供し、猛然として起つた時は、何人でも人間以上の力が出るから堪らない。男が一度斯う成つて来ると、あのれの地位を棄てるのは何ん道もない。斯う成つて来ると生命まで投出して懸るから遣り切れぬ。部長は斯う云つて恐嚇したならば、彼は直ちに平素の如く熱心に事務を執るだらうと思ひの外、怒は直ちに彼の心頭から發して來た。

「何だと？」
 この男にして斯んな荒唐しい權幕に成り、こんな暴言を吐かうとは何人に取つても實に意外千萬であつた。でもまだ此處で何んとか彼の感情に油を注したら、事は無事に治まつたであらうが、平素人に對する用意の修養を積んで居らぬ右の部長には、少しもその邊の手腕が無かつた。彼は何處までも我が地位の力を以て、我が部下の一人を威壓せんと企てた。

「眞面目に事務を執らんやうなら退社しろと云ふんだ、分つたか」
 「云ふまでも無い事だ、誰が汝のやうな、」

◎無情な人間

の不正な指揮に従つて何時までこんな處に居るものか」

「いやなら今日から罷めて了へ！」

「知れた事だ！誰が何時まで汝のやうな奴に使はれ居るものか」

「無禮者！」

「何方が無禮だ！」

平素温順なる彼にして、斯うまでも憤らうとは實に意外だ。部長もハツと思つたが、最う乗懸つた馬で仕方がない。

「歸れ！」

彼は黙つて直然と立つたが、忽ち怒に堪へ兼ねて卓子をドウと蹴倒し、その儘怒の火を去らざる部長は追かゆ。

『お待たせ！』と叫ぶ声に、部長は立ち止まり、腕を振り、

『お待たせ！』

と腹を宛発蹴蹴法にだ所を算盤で頭を三ツ四ツ擲附けた素早さは、何うも眼も興心なかな。『へー！』

○不況を非難する者、同情すべき暴行者

は其儘去つて了つたが部長はその爲十日ばかりも床に就いた。彼の部下は皆好氣味な者で、蔭では誰しも舌を吐いた。その後は何うも部長の評判宜しくなく、仕事終りかけては十分の腕を有つて居るが

惜しいかな部下の人人に不入望で、彼が居つては、何うも事務が擧らぬといふので、その爲終に自分の地位を失つて、今では内地に居ないといふ事だ。十分の器量を有つて居る人物でさへ平素人に對する用意が無ければ、その末路は概して斯んなものである。況んや尋常一様の人にと取つては大いに注意すべきことである。さればとて何人に向つても、お安く頭を下げるが好いといふのではない。我は我として、何處までも男兒の意氣面目を保たねば成らぬ。それは云ふまでもない事であるが、長者には長者に對する用意を以てし、同輩には又同輩に對する用意を以てし、其他婦人小供に對するまで、皆それ／＼に用意を以て接せんといふと、僅の言行から我が身の價值を酷だしく毀損する様な事があるであらう。さらば人に對する用意の生命は何かといふと、それは信義である誠實である。長者に對するにもこれが肝要、また自分の

同輩や目下の者に対するにも、その一言一行に於いて信義と誠實とが眼目である。要するに相手の身分の如何を問はず、世は何人に對する場合にても、いかにかにその辭を巧みにし、いかにかにその行を飾つて見ても、我が眞實眞情の籠つて居ない言行は例へば美なる外箱のやうなものである。いかに外見ばかりが立派であつても、肝腎な中實に價值が無かつたならば、人は再び喜んで、その商品は買はぬであらう。

◎誠實の人は獅子よりも強し

て自家の運命に長壽を與へんと欲する人は、先づ自家の言行をして、平素誠實濃厚ならしめる事は、是れ何より緊要なることであらう。

（三）先づ細君の信用を得よ

昔も今日のやうに信用といふ語は、世人の間に使用せられて居たであらう。使用せられるには使用せられて居つても、今日のやうに信用信用と世間の流行語には成つて居なかつたであらう。

或る物知りの老人に就いて、試みにこの事を糺して見ると、『そりや昔でも世人の間に用ひられぬ譯では無かつたですが、今日のやうに猫も杓子も信用く』とは云はなかつたです』

と。それ或は然りしならん、イヤ左様であつたであらう。何うも左様であつたやうに思はれる。

吾人はこの老人の語を聞いた時に、『成程左様であつたかな！』といふ感に打たれざるを得なかつた。

何故だといふと、單に信用といへば、誠の人に聞きが好い！イヤ人聞きが好いばかりでない、人は誰しもこれが無ければ世に立つて仕事をす

昔も今日のやうに信用といふ語は、世人の間に使用せられて居たであらう。使用せられるには使用せられて居つても、今日のやうに信用信用と世間の流行語には成つて居なかつたであらう。

或る物知りの老人に就いて、試みにこの事を糺して見ると、『そりや昔でも世人の間に用ひられぬ譯では無かつたですが、今日のやうに猫も杓子も信用く』とは云はなかつたです』

と。それ或は然りしならん、イヤ左様であつたであらう。何うも左様であつたやうに思はれる。

吾人はこの老人の語を聞いた時に、『成程左様であつたかな！』といふ感に打たれざるを得なかつた。

何故だといふと、單に信用といへば、誠の人に聞きが好い！イヤ人聞きが好いばかりでない、人は誰しもこれが無ければ世に立つて仕事をす

事が出来ないので、自他共に成るべく言行の一致せん事を期するのである。

然り信用そのものは、誠に大切なものであつて、その意義たるや洵に神聖なるものであるが、今日世人の所謂信用なる語に對しては、多くの場合に於いて、吾人は何等の敬意を表する念も起らぬ。

何故だといふと、今日の人に依つて發せられる所の信用なる語は、世人一般の流行語につて居つて、何等の重味もないからである。換言すれば、今日世人に依つて用ひられる所の信用といふ語は、他人に對して愛嬌に、

◎貴下は實に善くお稼ぎ成さいます

と云ふ位の意味合しか有つて居らぬ。

而も世人は一般に、近頃頻りにこの語を振廻して、何か仕事をしやうとする。そんな事は先づ何うでも可いとして、昔の人は相互の間に、甚だ稀にこの語を用ひたのに、今日の人は何故に、この語を濫用するやうに成つたのであらうか。

吾人をして忌憚なく言はしむれば、昔の人は其の心が正直で、その行が篤實で、何時も言行が一致して居つたので、何事を約束する場合に於いても、決して互に疑ひ合ふやうな事は無かつたのであらう。それ故に、昔日の時代に在つては、何人もこの語を口にする必要は、至つて稀であつたのだが、今日では一般に人の心が不正直に成つて、昔のやうに

○

◎言行の一致する人

が極めて稀に成つたので、『若し騙されては大變だ!』と云ふ所から念
を入れて、各自相手の信用を問ひ糺すやうに成つて來たのであらう。
これを一言にして云つて見れば、昔の人とは違つて、今日の人是一般に
虚偽を云ふやうに成つた爲に、自然信用といふ語が、人間各自の間に繁
く用ひられるやうに成つて、終に今日の如き盛んなる流行語と成つて
來たのであらう。

單に信用と云へば人聞きが好いが、今日の信用といふ語の裏を覗いて
見ると、いかにも醜辱極まる意味を有つて居る。例へば、『彼の男は世間の信用がありますか』
と云へば、別にそれ程耳立つては聞えぬが、今日一般に用ひられる斯く

の如き言葉の裏面を覗いて見ると、
『彼の男は世間の信用がありますか』

と云ふのは、取りも直さず、

『彼の男は泥棒はせぬ者と世間の人に認められますか』

と云ふのである。また我等が屢耳にする所の、

『彼の男は信用が置けますか』

と云ふのは、取りも直さずこれも亦、

『彼の男は泥棒はせぬ者と見ても差支はありませんか』

と云ふのと同じ事である。

昔はこんな激しい語は用ひられなかつたさうだが、今日では憚る所な
く、誰も以上の言を口にして、少しも怪しまぬ。要するに昔はこの語を
稀に聞き、今日では世の流行語としてこれを聞き、何人も平氣で居るや

うに成つたのは、少く云ひ憎い事ではあるが、昔と違ひ今日の世の中に
は、
泥棒根性

◎泥棒根性

を有つて居る者が、世間に多く成つて来た為であらう。
兎に角世間が物騒に成つて来たので、人と仕事を共にするにも虚然し
て居ると酷い目に會はされるので、互に其の人柄を疑ひ合つて信用の
多少を相吟味し、
『お前は泥棒はせぬか』
『いや、お前を人の寝息を覗ふやうな事はせぬか』
と互に探索する。
世人が一般にこんな玉合に成つて来たので、容易に人に信用せられな

く成つて来た。
ところが人は信用が無ければ、ひとり商賣上の取引のみならず、世に何
事も出来ないのて、我れも我れもと今日では、自己の信用を高める事に
苦心するやうに成つて来た。我れは是れ最高の動物たる

◎人間としての信用

を高める事に苦心するのであれば結構だが、悲しいかな其の實際を云
つて見れば、今日の所謂信用、即ち自分は不正な事は致しませぬ』と云ふ
商標を得る事に苦心するやうに成つて来た否、勢ひ苦心しなれば成
らぬ事に成つて来た。
然り今日は世人一般に、
『私は断じて不正な事は致しませぬ！』

と云ふ商標を得る事を日夜百方苦心して居るのは事實である。この商標を得んが爲に外に向つて色色と所謂運動をして居るがこれは抑も間違つた考へである。

然らばこれを内に求めてこの商標を得べき途ありや。然りこれを外に求めて自己の信用を高めやうとするよりは寧ろこれを内に求めて自己の信用を求めんとした方が遙に健全にして且つ安全なる方法である。さらば信用を先づ内に得るの方法如何。他人に信用せられんとするよりは先づ

◎おのれの妻の信用を得よ

これ何よりの上策上分別である。「そんな馬鹿な理屈があるか」と無下に笑ふ人もあらうが吾人は飽くまでもこれを以て自己の信用を高め

る最上の方法だと信ずるのである。

斯やうに云へば「あつとそれは易い御用だ！世間の人に對しては何等の信用もない拙者であるがひとり妻君に對してのみは何時も信用せられて居る」と言はれる向もあるか知らぬがそれが飛んだ見當違ひで他人に對して信用の無いやうな者は云ふまでもなく親に對しても妻に對しても兄弟に對しても子に對しても同時に信用が無いのである。

それは何うした譯かと云ふと世にはいくらかも實例のある事で、那等の疑ひを掻き餘地も無い。

例へば此處に一人の人があつてその人の平素妻子に語る所が、一實際と一致して違はなかつたならば、「我が夫の言ふ所は何時でも事實である」として、その人の妻は必ず夫の言行を信じて毫も疑はぬであら

である」として、その人の妻は必ず夫の言行を信じて毫も疑はぬであら

「と。ところが世の中は、我が妻子に對して、中中以て左様は行かぬ
人がある。斯くの如き場合には、何人も折節出會ふ事がある
うが、或る人の家に訪ねて待たせ、人の平素訪ねて居る所、一、二、
三、御主人は御在宅ですか」
と問へば、「はい、御主人は在宅でございます」
「不在です」
と妻君の答へる場合がある。此方は是非とも會はねば成らぬ用向が
あつたので、折角の御主人は在宅でございます、と申して居らうか、
何時頃にも歸宅に成りますが、分りには成りませぬか、と申して居
ると推して問へば、妻君は疑ひの色を面に見せ、
「何方までには歸宅なやうなことを申し候は居りましたが、夫の事では
いけませんから折角と待ち下さいまして、當には成りませぬでござい

す。其の世間の人は、此の世間の人は、此の世間の人は、此の世間の人は、
能く自分の素行を知つて居る妻女から、次に向つて斯くの如く云はれ
る男であつたならば、その人は最早何人に向つても、少しも

◎彼の男は時間を嚴守する人

だ。と云ふ時間上の信用丈けは既に全く無いものだ。と見ても、差支は無
い。折角の御主人は在宅でございます、と申し候は居らうか、
これに反して、他の或る三人の人を訪ふた場合に、
「御主人は御在宅で居らっしゃいますか」
と問ふ。すると妻君の返答に、
「今日は生憎不在でございますが、おそらく今日の何時頃には必ず歸つ
て参りますので、今日は御主人は在宅でございます」

「左様ですか、至急に目懸りたい事があるのですが、その頃には多分お歸りに成りまじやうか」といふと、お吉は「お吉様、お吉様、と念を推して問ふて見た時に、

「出先で不時の出来事でもあれば格別ですが、左も無い事には夫は何時でも、宅に言ひ置いた時間通りに必ず戻つて参ります」

平素時間に就いて斯くの如き確信を細君に與へて居る人であれば、その人は少くも、

◎時間上の信用

丈は、何人に向つても保ち得る所の人である。以上は單に其の一例に過ぎぬのであるが、他に斯くの如き實例を求めて見ても、世人に對する其の人の信用の程度は、細君の夫に對する信用

の程度如何に依つて直ちに豫想する事が出来るのである。

『家の主人は能く稼ぐ人である』と、自分の妻に思はれる人であれば、世人も亦其の人に對して必ず其の通りに信ずるのである。これに反して、平素自分の妻に『家の人のやうな怠惰漢は無』といふ感じを與へて居るやうな男であれば、世人一般の彼に對する思はくも、また實に其の通りである。

自分の妻女に對しては、萬事に不信不安を與へて居りながら、世人に向つて已れの信用を増進しやうなどとは、これ抑も根底から間違ひ切つた考へである。

仍つて云ふ。何人にもあれ、おのれを完全なる人として、廣く世人に信用して貰はうと思ふならば、先づこれを内に求めて、我が最愛の妻の心に、

『自分の夫は實に善良なる人である』

といふ信用を得る事が肝腎である。何人にもしろ、平生おのれの心を正しくして、その言行を篤實にし、先づ我が妻に對して、重く信用せられる人に成り得たならば、それと同時に其の人は、これを自ら外に求めずして、既に世人一般に對しても、我れは一個の完全なる人として、充分に信用を博し得た時である。而もこれとは反對に、先づ我が妻の我れに對する信用を失つて了つた時は、それと同時に我れは既に世人一般に對しても信用即ち

◎世渡りの看板

を取上げられた時である。

(三) 賑な人と淋しい人

十人十色、人さまざま、何んでもない事に怒る人、無益な心配する人、愚痴をこぼす人、その外いろいろな人があるので、つまりこの世は面白いのであるが、その人人に就いて、だん／＼と白い黒いの色分をして見ると、多くの人の中には何うも確かに賑な人と淋しい人の兩様があるやうに思はれる。先づ

◎賑な人

といふは、つまり何時も快活な人のことで、何時會つても元氣の充實して居る人で、言ひ換へて見れば、何時も生々として居つて物事に屈托せぬ人のことである。斯う云ふ人は、第一自分も愉快であらうし、人に對

しても生涯ドレ程快感を興へるかも知れぬ。だから斯んな肌合の人は、設令、人に愛されぬまでも、思ひ悪まれる事は断じてない。然らば、

◎淋しい人

といふのは何んな人だといふと、つまり何時も活氣のない人のことと何時會つても『私共では只今葬式を出しました』といふやうな顔をして居る人、更にこれを言ひ換へて見れば、何時もしよぼくして居つて、ひどく物事を苦勞にする人のことである。斯ういふ人になると、前の賑やかなとは違つて、第一自分も不愉快であらうし、人にも生涯その爲にドレ位不快な念を興へるかも知れぬ。だから斯ういふ人は、假令、人に思ひ嫌はれぬまでも、好き好まれるやうな事は断じてない。

◎春の日と冬の日

人はその何れを好むかと云へば、元氣のない冬の日よりは、何んとなく陽氣な春の日の方を愛するに違ひない。人に對しても亦その通りで、何時會つて見ても陰氣臭い人よりか、『やあ何うだ、まあ一杯やらうぢやないか』と云つたやうな調子の人を愛するに違ひない。何んと云つても人は人と組まなければ仕事は出来ん。人と組んで事を遣らうといふには、一人でも多くの人に好かれなければならん。換言すれば、百花爛熳たる春日の如き陽氣極まる、但し長閑な、その人に會へば何んとなく氣のゆつたりとするやうな人になるのが肝要である。併しながら、此處に大いに注意すべき事は、斯くの如く己れを修養せんとするにも、誠實を以て根底として懸らんといふと、實に飛んだ魔道に落ちて、動も

すれば、

◎辭巧みにして誠少き人

に爲り易い。ところが今日の世の中にありふれたそんな輕薄男子に
なるよりも、我れは寧ろ一個の淋しい人として、沈香もたかず、屁もこか
ぬ方がまだ、遙にましかも知れぬ。併し男が事を成さうといふに
は、何んと云つても人に悪まれては出來ること、出來ないやうな運命
になる。それには何うしても大勢の人に好かれる工夫をしなければ
成らぬ。と云つてもひやりとする程冷たい、即ち温かい心といつては
毫頭ない腹を抱へて居つて、ただ口頭や顔色ばかりで、何んなに賤な人
を装ふとして見ても、餌が無ければ魚はかからぬ。そんな事で人に好
かれやうなどと思ふと、恐らく一人の味方も得られないであらう。だか

ら萬事に誠實を根底として、何時も賑な人と成らん事を期するが善い。
こんな風に出來た人だと云ふと、確に萬人に好かれる、愛せられる。イ
ヤ單に好かれ愛せられるばかりでなく、斯くの如き人は萬人より確に
懐かれ尊敬せられずには居ない。設令、何んなに淋しい時でも、悲しい
時でも、またつらい場合にも、斯ういふ風に、出來た賑な人がやつて來
ると、その快活な氣に撃たれて、一家の生氣は俄にパツと復活する。け
れどもこれとは反對に、淋しい人がやつて來るといふと、一家の意氣は
益す沈んで、主客一緒に無益な愚痴をこぼすやうな事になる。兎に角
多數の人に取つて、

◎金は元氣のバラメートル

に成つて居る。即ち金があれば元氣があり、金がなくなれば元氣も無

くなるといふのは、多数の男女に取つて争はれぬ事實であるが、此處に述べる賑な人、淋しい人といふのは、此方の心次第では、金錢の有無に依つて是非何方にならねば成らんといふ理屈はない。言ひ換へて見れば、人は金があるから賑な人に爲り、また金が無いから淋しい人に爲るといふ譯のものではない。何よりの證據には、金は腐る程有つて居る人でも、例へば、秋口の蛇を見たやうにゾツとする程淋しい人もあれば、また何んなに貧乏して居つても、

◎今百萬圓儲かつた！

といふやうな元氣を顔に示して居る賑な人もある。それはその人その人の人の不斷の腹の据方次第で何うでも都合が附くのである。何方さまでも世の中に多少とも苦勞のないといふ人はない。否、苦勞が即ち

浮世である。人間から苦勞を引去つて了つたならば、この世は滅亡して了ふであらう。其處を思はず、毎日苦勞を苦勞にして、泣いたり、驚いたり、悔いたり、悲んだりして居た日には、とても人生五十年の年期奉公は無事に勤まらぬであらう。傳へ聞く米國の費府にモルレーといふ裁縫師があつた。彼は屈指の裁縫師として、或る大きな店の職工に雇はれて居たが、何んでもない事に溜息を吐くのがこの男の癖で、果は

◎溜息モルレー

といふ綽名を人に附けられた。けれども勝れた腕を持つて居るお蔭に依つて、これが却て彼の評判を高める本に爲り、『何うか溜息モルレーに仕立てて貰ひたい』といふ客の注文を受ける事に成つて居つたが、その中に誰云ふとなく、『溜息モルレー』の手に觸れた着物を着ると、人に嫌

はれるやうになる』といふ噂が立つた。すると今度は客の方で、その店に着物を注文する時は、何の顧客も二様に『何うかおれの着物はモルレIの手に觸れさせぬやうにしてくれろ』と念を入れて頼むやうに成つた。さあモルレI先生の口は上つたり、斯う成つてくると彼は益す歎息する。

主人も終に此の男がいや氣に爲り、一度は既に解備しやうかとまで思つたが、腕は實際非凡なので、一日篤と利害を諭して、『今後は是非とも其の悪癖を改めろ。それにはおれが善い事を教へてやらう。若し太息が口に出かかつたら、スグにそれを噛み殺して、太息を吐く代りに鼻唄でも唄へ!』と云つた。するとモルレI先生も、これは我が身の一大事と思つたのか、善く主人の説諭を聞いて、今度は太息を吐く代りに唄ひ出すと、淋しい顔色もだん／＼取れて、次第／＼に賑な男に爲つて來た。

すると今度は又從來の不吉な綽名を取去られて、

◎鼻唄モルレI

と呼ばれるやうに成つた。ところが之が又評判に成つて、『ぢやア一番鼻唄モルレIに着物を仕立てさせて見ろ』といふ物好きな顧客がポツ／＼出來て來た。モルレI先生元氣付き、大いに笑つて大いに唄ひ、大いに仕立てて見ると云ふと、今度は前の不吉な噂とは反對に、『鼻唄モルレIの仕立てた着物を着ると、非常に金が儲つて、萬事仕合が好くなるが、殊にまだ無妻の男は、美人に婚約をドシ／＼申し込まれる』といふ彼に取つてはこの上もない都合の好い噂が立つた。すると鼻唄モルレIは大あたりにあたつて、婚禮着の注文丈でも中中以て一人では手廻らぬやうに成つて來た。其處で或る忙しい場合には、断ると、客は中中

承知せず、『ぢやア或る部分丈でも是非モルレーに！』といふ事に成つて来た。ここに於いてかモルレーは鼻唄に依つて大いに身代を唄ひ出し彼の顔は以前と變つてます。ニョクノクして来たさうだ。若し我が勢力の貧しい爲に、自然人に嫌はれるやうな傾きのある人は平素無益に愁歎する代りに鼻唄モルレーを學んだならば、少くも多少の効果は必ず擧げ得るに違ひない。

(四) 商人と着想 (白髮富翁談)

近頃世間で『獨創的頭腦養成法』などと云つて、何か前人未發の新問題でも捕へたやうに嘯し立て居るやうだが、ひらつたく云つて見れば、何んでも無い事ぢや。

◎獨創的頭腦

などと云へば、何んな頭かと思ふ人もあるか知らんが、何アにこれも矢張同じ型の人間の頭で、別に髪の代りに黄金の針が生へて居るといふ譯でも無いのさ！一言にしてこれを云へば、ただ着想即ち

◎おもひつき

といふ事なんだよ。何事をする人でも、好いおもひつきの浮ばんやうな人間は駄目だ。彼等は決して成功する資格のない者だ。そんな人間なら寧ろ初めから人並に新らしい仕事などは始めん方が確だ。好いおもひつきの浮ばぬ人、つまり八方に氣轉の利かん人間の始めた事業に、旨く尻の結ばつた事は、先づ無いなア！ハッハッハ！

就中商人などは左様だよ。

◎イヤ其奴は旨い！

と十人に手を打たせるやうな名案の時時胸に浮んで来るやうな男であれば、假令一文半錢の資本はなくとも、何時か一度は金を庫に喰らせずには居らんが、何時もクダラン思案ばかり浮ぶやうな男であれば、假令百萬兩の資本を有つて居らうとも、そんな間拔には斷じて金の儲かりさうな筈はない。まあ早い話が人間は、さう云つたやうなものぢや

らうぢやないか。ハッハッハ！

眼を開いて世間を見なさい！相撲取ぢや無ないが、禪一本で『さあ来い！』と世の中の土俵に立つて或る機會に乗じてウン身代を拵へたやうな人間の前身を跡ねて見ると、彼等は皆

◎おもひつきの人

である。世には昔から得て無職に苦しんで居る者が多い。さうして彼等は皆歎して居る。『吾儕は何故こんな不仕合だらうか』又『吾儕は何うして何時もこんなに困るだらうか』などと下らん愚痴を云つて居る。而も其の根本的原因は何かと云へば、彼等の頭の裡には、何時も好いおもひつきが浮ばんからである。

我我商人の側では特に左様だよ。おもひつきさへ好からうなら、世間は何んなに不景氣でも儲かる商賣はいくらでもある。また何んなに困つて居る時でも、金の儲かる仕事をめッけるのは何んでもない。

ちよつと一例を擧げて見れば、その名は誰も知つて居らうが、今日現在富豪として世界に高く評判されて居る米國の或る豪商は、僅かばかり

の草鞋錢を有つてポストンに出て來た時は、まだ十六才の一少年であつた。

彼は先づ俸公口を探して見たが、何處へ行つてもお生憎さまといふ爲體！

少年は弱つた。失望した。併し、彼の失望はホンの刹那で、直ちに

◎好い着想浮がんで來た

と思ひ給へ。『いよ／＼雇主がない！ヨシ然らば』と云ふので、彼は一雙の古車を買つて、自らそれに古板で箱を取付け、三里ばかり田舎の濱邊に行つて、蠣をウンと買出して來て、『蠣はア／＼』とぶれながらポストン市中を賣歩いた。ところが至極よく賣れて、一週間の後には彼は五弗の金を儲けた。

それ位氣轉に富んだ小僧だから、今度はその五弗の金を資本にして、だん／＼好い事を思ひつき、終に莫大な身代を拵へて、貧家の子弟の爲に大學を建てて寄附する、圖書館も奮發してやる、薄命者の爲に慈善病院も立ててやるといふ始末、何んと感心な男ではないか！

斯やうな例は他國に求めるまでもなく、我が國にも古から澤山あつたよ。イヤ／＼無資本で立身した商人は、皆彼等の胸にヒョイト浮んだ思ひつきから身を起した人ばかりだと云つて好い。

昔江戸時代に、或る一人の商人の如きは、『江戸に出て、何うかして大物にならう！』といふ志を抱き、東海道五拾三次をテク／＼と遣つて來て、品川に着いた時には最う一文無しさ！腹は空いたし、疲れは出たし、モウ聲も出ぬ程弱り切つたが、これから江戸に入つた所で、金は無し知邊は無し、一膳飯も食ふに食はれぬといふ切ない身の上！

◎さあ何したのか

と大將大いに考へながら、ポツ／＼江戸の方に向つて進んで來る中、その時分の事だから、道傍にフイと古雪駄の棄ててあるのを目附出したと思ひなさい！

頃しも夏の差入で、非常に蠅の集る頃、或る一種の着想はスグに其の男の胸に浮んだ。

「ヨシ！これで一番晝飯の代に有附くべえか」と云ふので、スグ海邊に下りて、その古雪駄の表を剝いて裏に附いて居る皮を綺麗に沈ひ、其奴を約二寸平方位に裁つて大切に懐に入れた。

何うするつもりか知らんが、右の男は左も嬉しさうにニコ／＼笑ひ、またポツ／＼と行く中に、細い竹が一本道に落ちて居つた。

「占めた！」

早速その竹を拾ひ取つて、用意の小刀を出して中から巧く二ツに切り、その一方を好い加減に割つて、其處に前の皮を一枚挟み、先をしつかり紙縫で結へると、立派な蠅叩が二本出來た。

悔蔑する事勿れ！彼は斯くの如くして得たる

◎二本の蠅叩

を商品にして、一步江戸に入るや否や、直ちに江戸商人の仲間に入つた。彼は行行聲をあげて、

「蠅叩はえ！蠅叩ッ、蠅叩の御用はございませんかな？」

所がスグにも客が附いた。

「オイ蠅叩！」

「蠅！」

「それは一本いくらだ？」

「二十文でございます」

「馬鹿に高えなア！モツと負からんかい」

「旦那これは皮でございます！何うか一本も試し成すつて下さい、至極
お爲にも宜しうございます、へい！」

「ぢやア、一本買はうよ」

「有がたうございます!!!」

彼は直様大威張て、その日の晝飯にありついた。

此一事を觀ても、着想と云ふ事の如何に商人に大切なるかは判るであ
らう。

(五) 感興湧出の時機

成功したる事業の前身は準備である。準備の前身は勉強である工夫である。何事をするにも皆それ相當の準備を要せぬものは無い。準備を省いて、ただ事の結果ばかりを得やうといふのは、種子を蒔かずに實を收めやうといふのと同じことである。特に藝術上のことなどはさうであらう。

◎十日一水、五日一石

この工夫、この忍耐、則ちこの大準備がなかつたならば、いかなる天才の人と雖も、價值ある藝術家には成れぬであらう。鏡が無ければ影は映らぬ。機會は準備ある人でなければ訪れぬ。「インスピレーション」と

は、今日多くの人の口にする所であるが、彼は決して

◎準備なき宿

には訪れぬ。天火は準備ある頭腦にのみ、特に電馳して來るのである。一杯滿ねば水は溢れぬ。平素の苦辛修養に依つて、藝術家の頭の中に、或る貴いものが滿ち溢れて來た時は、或る機に觸れて天火一閃、直ちに人神感應の境に入つて、我れ知らず立所に大なる事業を敢て成し得る時である。「王とは爲し能ふ所の人をいふ。その瞬間を捕へよ」とは個中の秘訣を漏したのである。ここに吾人の記憶すべき事がある。神來若くは天火といふも、直ちに其の本體は何物なるかを穿鑿すれば、彼は

◎熱心の別名

に過ぎぬのである。昔三條小鍛冶宗近の前に現じて相槌を打つた伏見の稻荷、左甚五郎の顔を見てニコ／＼と笑ひ出した京人形、彼等の本尊は何かと云へば、是れ皆彼等自身の熱烈熾火の如き藝術的大精神の反影、身に外ならぬのである。換言すれば、大なる作物は大なる天火、即ち大なる準備の實顯したものである。ただ大小の別こそあれ、これを證明する實例は、今日の世の中にも定めて少くないであらう。

◎荒木探令君

は、我が國今日の日本畫界に於ける狩野派のオリソリチーである。近時君に就いて世に傳ふべき佳話がある。君は今日の地位を造られる

丈、平素自己の天職に向つてその準備に骨を折られることは、實に言語に絶して居るとの事だ。この春明治四十一年の梅の苔の、まだ堅く口を結んで居る頃であつた。春季展覽會に

◎君獨特の山水

を出品しやうと思ひ立ち、既に昨年の落葉に時雨の音を聞く頃から熱心に準備して居られたが、上に上と藝術的慾望が加つて來て、何うしても筆を執る氣に成らなんだ。その中に一月経ち二月過ぎ終に『出品期限は最う今日限』といふ日まで、その一水一石一木一草をも見はすことが出來なかつた。君は出品期限も忘れて、日夕苦心慘憺し、一日庭に出て竹箒を執り、徐に其處邊を掃き、~~なほ~~尙、一心に思ひを凝して居られると、其處にこれも一人の有名な畫僧が見えて、

『荒木君、君は最う出品したか』

『イヤ、まだ!』

『今度は出品せられぬか?』

『イヤ、大いに遣る積りだ!』

『でも、最う今日さりだぞ』

『え、ッ! そりや大變だ!』

云ふより早く箒を投げる、その瞬間に一道の

◎天火が來た!

君は匆匆書室に駈込み、

『何んでも關はぬ墨すれ!』

令聞驚き

『あなた何う成すつたんです？』
 『まあ、何んでも好いから墨すれ〜！ 午飯も糞もあるもんか、モウ今日切だ！ 今日切だ！』
 『あなた其の木格わくに張つてあるのは、他所から頼まれた絹ですよ』
 『他所のも糞もあるもんか。モウ今日切だ！ 今日きりだ！ 何んでも關はん墨さへ塗つておけば好いんだ！』
 一道の天火は直ちに君渾身の藝術的血液を沸騰せしめ、同時に君は渾身書繪と一物一體の靈境に進入し、筆の力か我が業か、但しは神の靈現か、我れが書いたか、筆が書いたか、僅數時間にして一幅の山水を畫き終り、筆を投じて氣は猶夢現の間にあつた。この作果して善しとも覺えず、悪しとも思はず、一切是れ空、一切是れ夢、即刻規定の順序を経て、展覽會に出品すると、直ちに會の呼物と成り、第一着に宮内省御用品といふ

ことに成つた。當時君の此の作物に接した人は云ふ。

『何うも非常な出來であつた！』

◎秋山の暮色

躍如として全幅に靈動し、さすがは斯界に於ける老大家、荒木探令氏の作物だと思はれた！』と。爾來君に向つて同一の山水を依頼する人極めて多く、近時君を訪ふ人にして『秋山の暮色』を語らぬ者は無いといふ。而も是れ斯道の老大家、平素自家の天職に對して、大なる準備を有する君の如き人にして、始めてめ斯くの如き天火には接觸することが出来るので、平素その修養、その準備なき人にしては、到底斯くの如き

◎神來の氣

に觸れることは出来ぬのである。大なる藝術家にして、斯くの如く元氣の全身に充實して來た時は、僅少時間の内に於いても、斯くの如き傑作を敢て爲し得ることがある。併し、これは獨り藝術家ばかりに限つた事では無い！如何なる道に従事する人に取つても、自家の事業に向つて、大なる準備を造つておけば。

◎天火一閃

何時か一度は大いに爲すべき時節が必ず來るのである。その瞬時を捕へるのが、各人各自の事業を營む上に於いて、恐らく何より肝要なことであらう。重言す、天火と云ひ、また神來の氣といふも、畢竟すれば皆是れ自家熱心の別名に過ぎぬのである。

(六) 獨立的人物と依賴的人物

人に兩様ある。一は自己を當にする人で、他の人を當にする人である。自己を當にする人といふのは、萬事に自己の能力を當にして仕事をする人で、人を當にする人といふのは、萬事に人の力を當にして、人の蔭で何か仕事をしやうと云ふ人である。事を爲すに確乎たる自信力を以て何處までも自己の力を以て爲し遂げやうといふ氣概のある人は、遅かれ早かれ何時か一度は必ず成功せずには居らぬが、萬事に他人の力を當にして仕事をしやうといふやうな弱虫は、終生何事も出来ぬであらう。實にちよつとした事であつたが、自分は近頃或る二人の人に會つて

◎大なる教訓

を受取ることが出来た。一日一人の人を訪ねて、此方はスグにも用談にかからうとすると、主人は頻りに手を拍いて、『オイ茶を持って来ぬか』と叫んだ。ところが生憎返事がない。無論獨り手に茶が座敷に出て来やう筈はない。『オイ玉は居ないか、お客さまだよ、早くお茶を持って来ぬか』再び呼んだが返辭が無いので主人は咄き、『今日は下婢一人で、妻が居ないもんですから』と云つた。『いや最う何うかお構ひ下さいませ』と云つて、自分は早速用談を果し、告別をして立上ると、『何うも失禮しました』と云ひながら、主人は立關まで送つて來た。『何うか最うお構ひなく』と云つて靴を穿き、格子戸をがらりと開けて、一步表に踏出した時、一人の女中がバケツに洗濯物を入れて井戸端から歸つて來た。自分

はその儘門の外に出たが、『彼んなに呼んだのに何故來なかつた？』と云つて、主人の

◎下婢を叱る聲

が後に聞えて居た。その日スグに其の足で、また一人の人を訪ふた。すると折好く其處に居合せたものと見えて、主人自身に立關の障子を明け、『ア、入らつしやい！何うか此方へ』と云つて二階に案内し、時侯の挨拶が終ると共にこれも亦手を拍いて家人を呼んだ。おなじく返事がないと思ふと、此處の主人の遣口には大いに違ふ。『ちよつと失禮致します！』と云つて下に下りたかと思ふと、

◎自分でスグに茶を持て來た

さうして手づから『粗茶ですが何うか』と云つて心持よく自分に薦め、快活に自分の用談に應答してくれた。前の家では『折角訪ねて来たのに、茶の一杯も出さんでは』と云ふ頭に荷物のあるためか、主人は何んとなく

◎不快の態度

を以て應待したのに引換へて、この家の主人は他に何んにも心を奪られず、談話に充分身を入れて、自分の云ふ所を熱心に聞き、且、最も快活に答へてくれたので、此方は大いに満足し、『いや、何うも有がたうございませした！』と云つて速に引取つた。何時もそんな事を考へる程頭の働く自分では無いのだが、この日は以上の二人に就いて、餘りに著しく相違した實例を示されたので、おもはず一寸考へて見た。實に些細なる事のやうであるが、二人の行爲に就いてしっくり考へて見るといふと、確

に一の活教訓を受取ることが出来た。その時自分はスグに想像した。今日の二人の遺口に就いて考へて見ると、『前者は事を爲すに他人の力を當にする人で、後者は

◎自己の力を頼む人

ではあるまいか』と。先づ斯う假定して置いて、平生二人の事業の遺方を考へて見ると、自分の想像は、確なる事實であることを見出した。重言すれば、前者は果して事を爲すに、何時も他人の力に便る人で、後者は何時も自分でサツサと機敏に働く人であつた。今日二人が社會に對する價值の上から云つて見ても、前者は先づ失敗者の分類に屬すべき人で、後者は確に成功者の名簿帳に籍を置くべき立派な資格のある人である。

嘗て一人の事務家より斯う云ふ話を聞いたことがあつた。

(七) 動物的慾望を強くせよ

世の中は二様の人物を以て満されて居る。その一は人を征服する人で、他の一は人に征服せられる人である。あの力の力を以て一人でも多く他人を征服し得る丈、それ丈その人は強いのであるが、一人でも多くの人に征服せらるればせらる丈、その人は弱いのである。言ひ換へて見れば、一人でも多く他人を征服し得れば得る丈、それ丈高くその人は、

◎ 社會の上座に坐すべき人

であるが、これと反對に一人でも多くの人に征服せらるればせられる丈、それ丈低くその人は社會の下席に列しなれば成らぬ人である。我等がこの世に處する上に於いて、前者即ち自己の力を以て多數の人を征服し得る丈の實質ある人に成り得れば、生涯大手を振つて世の中を渡る事が出来るが、これに反して後者即ち自己の力の足らぬが爲に多數の人に征服せられて、何時も泣面ばかりかいて居るやうな弱蟲に成つたが最後、終生幾多の人に握屁ばかり嗅がされて居なければ成らぬ。何人も斯くの如き境遇には安んぜざるまでも、終生斯くの如き圈内に不平を抱いて貴重なる光陰を潰し、何時まで經つてもあの長の上に頭を蹴られたり踏まれたりして一番グツと大反お返しに反すことの出來ないやうな弱蟲は、生涯

◎ 人生の戦争

を談ずる資格の無い人間で、斯くの如き弱蟲は何時までこの世に生きて居つても、浮世の乳の旨い味は一度も知らずに死ぬのである。また斯くの如き無氣力な人間は、何時までも生きて居て見た所で、人に示して誇りとすべき仕事は一度も出来ぬので、詰る所は不幸借金その外有りとは有らゆる人生の醜辱を歩けない程背負ひ込んで、泣泣冥土に歸る位が關の山である。

わざ／＼男子に生れて来て、こんな詰らぬ事でこの世をお暇になる位ならば、寧ろ鳥か獸にでも生れて来て、好きな物を腹一杯食つて、おもふが儘に空を飛び、或は野を縦横に駆廻つた方が、何丈儲けものかも知れぬ。おなじ人間に生れて来て、その邊の優劣高下を篤と分別してか

からぬと云ふと、ひとり無意義なる生活の下に、可惜人間の一生を棒に振つて了ふばかりでなく、凡ての方面に亘つて、こんな事ならば、寧ろこの世に生れて来なければ好かつたなどといふやうな事に成らぬとも限らない。

然らば何うすれば、我等は多數の人を征服する事は出来ぬまでも、多數の人に征服せられずに済むか、即ち人に負けもせず又勝ちもせず、無事平穩にこの世を渡る事が出来るか、それより一步進んでは、我れは常に何うすれば、多數の人を征服して我れは是れ

◎ 社會の強者

としてこの世に立つ事が出来るといふと、何はあいても先づこの身體を猛獸の如く強壯にして、精神を猛烈に養生し、如何なる強敵に何

時何處で出會つても、斷じて一步も引かぬと云ふ雄心と體力とを、進んで自造する事が肝要である。古來いづれの時代に於いても、智者や學者は随分在つたに違ひない。

然るに其の智、その學を後の世にまで傳へ得たと云ふ人は幾人もありはせぬ。

それは何故かといふと、人に勝れた智慧はあつても、學問は懐いて居つても、それを活用大活用する體力並びに雄心の不足して居つた爲である。

◎遺憾千秋の紀念碑

古から世の中に未成の事業の多いのは、皆是れ悉く其等の智者や學者輩の事業中途にして空しく斃れた

である。然るに今日の青年輩は、愚にも此處に留心一番せず、徒らに死學を學び修めんが爲に、これあればこの事は成る自家の雄心を傷り、自家の體力を殺ぎ、我が運命の源泉を涸渇して未來に期する所あるは、その木の根を斷じて枝葉の繁るを待たんとすると、何等の選ぶ所があらう。

斯くの如き愚なる立身法並びに處世法に依つて、大いに成んと期する所あつても、その企圖は斷じて成功すべきものでない。

さらば我等は如何にすれば人間の事業に成功するか。六十年來の血税を拂つて、余が實驗し來たれる所に據れば、人生の義務を完全に果さんとする人は、道德的感念に己れを支配せられるよりも先づ

◎動物的慾望

の盛んに起つて来るやうに何は置いても力める事が肝腎である。斯くの如き大膽なる説を作せば世人或は余が平生の行爲に向つて大なる疑ひを懐くであらう。然れども余は據る所なき言を爲して、徒らに世人を惑はすものでないといふ事を爰に證明しなければ成らぬ。否、これに就いては、余は別に彼此と説明すべき必要を認めない。何んとなれば、人生の行路に就いて、多少實驗の功を積んだ者であるならば、世間の實際上に於いては、我等人間には、道德上の感念よりも、動物的慾望の遙に必要なる事を感じるであらう。

例へば此處に道德的感念の強い人が在つたにしても、その人にして若し身體が虚弱であつて、勢ひ薄志弱行の人たらざるを得なかつたならば、

◎人間としての價值

は何處に在るであらう。世の實際は千萬言の空言よりも一事の實行を貴ぶのである。然るに身心共に虚弱にして人間の義務を全ふするに堪へぬ人ていかに其の口頭ばかりで仁義道德を説いて見た所で、自他の上に何等の利益も無いではないか。これに反して、その心には道念なく、仁義道德などは絶えて口にせぬ人であつても、熱心に餌食を求めて縦横に野を駆ける猛獸の如き強健無病なる身體を有し、併せて鐵石の如き意思の力を有し、能く活社會の奮闘に堪へ得て、

◎余は渾身精力なり

余は全身猛烈なる意思なりと云ふやうな人であつたならば、彼は日常

人間として世に立つ實際の上に於いては、道德の實行者として人生の義務を果すことが出来るであらう。社會の常に要求する所の人物は、斯くの如き人生の實務實際に堪へ得る所の人であつて、ただ口頭ばかりで仁義を説いて、何等の實行をも成し得ざる人の如きは、幾人頭を列べて居つても、世には何等の利益もない。換言すれば斯くの如き無用なる人間は、一人でも早く最後の息を引いた方が世の爲にも人の爲にも好いのである。

ところか世には何うかすると、口には常に道德を説いて、何等の實績をも舉げ得ない人がある。

何時も茅屋の裡に住んで、汚穢見るに堪へぬやうな百結衣を着、その日の米代にも困り切り、妻子を飢し、人には金を借倒し、ざんく迷惑を掛けて居りながら、口には仁義道德を唱へて、ズウ／＼しくも君子人を氣

取つて居る實に

◎ 惡むべき人間

がある。言ひ直して見れば、體力も弱く意思の力も薄弱なる爲に、何一事も仕事らしい仕事は出来ぬ所から、人生の有らゆる慘事に捕へられ、謂はゆる首も廻らぬ境遇に陥りながら、片腹痛くも長屋の中に瘦脰を張つて、口には人間臭い事を云つて居る奴がある。

斯くの如き劣等なる人間に就いて判断すれば、その謂ふ所は假令何んなに立派であつても、彼の行爲に至つては、實に惡むべき

◎ 社會の凶賊

である。

文明は弱者を惡む。今日の時勢は斯くの如き弱者劣者を酷烈に征伐せんと力んで居る。

これに反して、假令その心中には道念甚だ乏しきにもせよ、毎日勸めて怠らぬ丈の否、益す力めて進み得る丈の體力を有して居る者であれば、その言ふ所は強ち空理空論の倫理説や道德論には合はぬにしても、それが日日の實行實跡は神の我等に課せられたる自然の理法に適合して、あのれが常に行ふ所は、あのづから是れ已れをして、

◎眞の道德家

たらしめるであらう。尙、明瞭に云つて見れば、人に兎や角言はれた所で、あのれの力と工夫とを以て食を得、我れを養ひ、妻子を飢さず、進んでは我れも富國の一元子と成つたならば、取りも直さず其の人は名義は

兎に角實際の上に於ては眞に是れ尊敬すべき道德家である。

然らば我等は平素如何なる心がけを以ていかに我が身を處して行けば、前者の如き弱虫と成つて、人に征服せられるの憂ひなく、常に後者の如き

◎邁往敢爲の人

として人を征服することが出来るであらう。これは我等が世に處する上に於いて、大いに工夫し實行すべき問題である。この工夫、この實行の如何に由つて、つまり我等は人生の優者たり又劣者たるのである。さらば如何にすれば、凡人の征服者と成り、戦勝者と成つて、衆人を支配する事が出来るかと云ふに、それには先づ動物的慾望の盛んに起る人と成ることが肝要である。

これに就いて何人にも解り易い、最も手近い例を一ツ挙げて見れば、ウンと食つてウンと働いて、ウンと心持快く眠れる人に成ることが必要である。何人に限らず、先づ斯う云ふ人に成り得たならば、その人は

◎實際的道德家

として、必ず世の中に立てるであらう。健康は人に成功の道を授けるが、病軀は人に鬱憂、煩悶、非哀、艱難、痛苦、厭世、失敗、早死の外には何物をも教へないのである。

例へば此處に甲乙二人の人があつて、一人は充分動物的慾望に富んで居り、ウンと食つてウンと消化し、ウンと働いてウンと遊び、ウンと心持よく眠るといふ質の人であり。乙は男子の癖に、一碗の飯を食つても消化し切れず、何時も青瓢箪を見たりやうな顔をして居つて、仕事をして

も愉快に出來ず、遊んで見ても愉快に遊べず、眠れば下らぬ夢ばかり見て居つて愉快に眠られず、覺めれば口に愚痴ばかり溢こぼして居るやうな人であつたならば、以上の二人がイザこれから奮闘一番すると云ふ場合に臨み、人は何方に味方を仕やうと思ふであらう。實際何方が勝つてあらう。云ふまでも無く乙は忽ち甲の爲に征服せられて仕舞ふのである。

これを古今の歴史的人物に問ふまでもなく、今日社會に實在する人人に就いて糺して見ても、食慾を始め其の他一切の動物的慾望の盛んな人間程、益す

◎猛烈なる生活力

を有し、動物的慾望の弱い人間程、その活動力も亦弱いのである。

少くも一食に五合飯、肉一斤位を平げて、それを充分に消化し得る位の強い胃袋を有つて居る男であれば、他の慾望もこれに比例してまた強く、同時に其の體軀は肥大強健にして、おのづと執固確實なる意思力を有し、人生の艱難痛苦と衝突しても、其の強堅なる體軀と意思とは終に彼等を一掃して、人間の事業を完成する事が出来る。斯くの如き人にして、始めて人の風上には立てるのである。

然れども一食に僅か一合の飯を食つても、これを充分に消化するの力なく、常に薬に親しむやうな弱虫では、他の慾望も從て弱く、斯くの如き人物の常として、何事を爲すに當つても、その實行力の微弱なるが爲に、豫期の結果を收むる能はず、終に

◎人生の失敗者

として多數の人に征服せられ、生涯人に頭を踏みつけられるのである。以上は死書の空論を根底として立論した空想では無く、前にも云つたやうに、余が六十年間の血税を拂つて學び得た所の實際である。而も猶余の説を疑はれる人あらば、世界に於ける古今の偉人傑物に就いて、仔細に吟味せられたならば、假令如何なる學者と雖も、余の所説を根底より打破する事は不可能であらう。否、以上の言は、假令如何なる識者と雖も、斷じて打破すべからざる根底を有して居ることは、ひとり余が確信する所なるのみならず、多少人生の消息に通じて居る者は、何人と雖も恐らく余の説に異存を唱ふる人はあるまい。若し余が以上の言を以て一笑に附し去る人があるとするれば、憚りながら其の人は、我等が

◎日常の戦争

に就いては、未だいくらの實戦をも経験しない人であらう。動物的慾望を盛んにせよ。余が多年の實驗に據れば、實に是れその効果直ちに顯著なる人間處世の要訣である。

(八) 實業界の好戦士

社會は戰場、各人は勇士、世の中は何事をするのも皆戦争だと思ひ給へ。殊に商買の道などは左様である。ただその武器に於いて

◎銃と算盤

との別こそあれ、勝つか負けるか、勝つかその邊の進退駆引に至つては、銃若くは劍を把つて血烟を立てる戦争と何等の異なる所はない。

ここに兩軍相對して、いざ戦争を開始するといふ場合に臨み、上に信頼すべき指揮官が附いて居つて、よろづの指揮をじなかつたならば、彼等が部下の猛士勇卒は、徒らに無駄骨を折るばかりで、あそらく

◎有効なる戦闘

は出来ぬであらう。この方面から見れば、指揮者は軍の首腦者である。首腦者の確りして居る軍隊でなければ、斷じて十分に戦ふことは出来ぬであらう。併しながら又他の一面より見る時は、戦闘に際して一番大切な者は戦士である。いかに指揮官ばかりが非凡の手腕を有つて居つても、彼等の部下が怯夫弱卒を以て満されて居つたならば、いかなる有効なる作戦計畫も畫餅に歸して了ふであらう。要するに將と卒とは車に於け

る兩輪の如きもので、彼等は兩兩相待つて、始めて

◎軍隊の威力

を發揮するものである。軍隊に取つては、將卒その孰れも缺くべからざるものであるが、ここに以上兩者の間に於いて著しく異なる點は、凡そ一軍の首腦者たるべき人は、その數に於いて限りあつて宜しいが、彼等が部下の猛士勇卒に至つては、その數に於いて限りがない。換言すれば

◎猛士勇卒

の一人でも多い程が、その軍隊の威力を強めることになる。つまり作戦の計畫は、軍の首腦者に依つて爲されるのであるが、戰場に於いて其

の計畫を實行して功蹟を擧げるのは、一に彼等が部下の猛士勇卒の働きに依らなければならぬ。然らば戰士としては、いかなる資格を備へた者が最も好く戦ふことが出来るであらうか。無論力の強い男に越したことはあるまい。否、單に強力といふ一點張では間に合はぬ。力の強いと共に武器の取扱に熟練して居なければならぬ。否、單に力が強くて武器の操縦に熟達して居るばかりでは、まだ決して好戰士とは云へぬ。戰場に於ける

◎好個の戰士

としては、以上の要素を備へて居る上に、更に進んで大膽でなければいかん、勇敢でなければ間に合はぬ、それと共に或る場合に於いては、奇智に富んで居なければならぬ、また人をして驚かしめる程辛棒強い所も

無ければならぬ。その他自信も必要、果斷も大切、就中最も敏活に行動する事の出来るものでなかつたならば、彼は斷じて好個の戦士と稱すべき資格はないであらう。而もその眼目とする所は、戦士としての氣概である精神である。以上の各要素を備へた士卒が大勢揃つて居たならば、その軍隊の向ふ所は、何時でも味方の勝利を期することが出来るであらう。また斯くの如き軍隊を引率して居る將帥でなかつたならば、斷じて彼の敵國を征服することは出来ぬであらう。これに反して、怯夫弱卒を以て滿されて居る軍隊になると、その首腦者には、設令、何んな秀いでた參謀官を以て滿されて居らうとも、斯くの如き軍隊の向ふ所は、何時も敗軍の外には、何物をも得ぬであらう。要するに、軍隊に於ける首腦者は、云ふまでもなく大切であるが、その配下に好個の戦士が集合して居なければ、幾たび生命を堵して戦つて見ても、

斷じて十分に其の志を達することは出来ぬであらう。いざと云ふ場合に成つて來れば何うしても、手に武器を把つて親しく勇戦奮闘する

◎ 實戦者の手腕

に依らなければ仕事は出来ぬ。我が配下の士卒にして、全軍の士、皆然りとは行かぬまでも、その多數が好個の戦士であつたならば、それが首腦者に取つては、何れの場所に於ける戦闘に於いても、豫期以上の効果を收め得るであらうが、これに反する配下を有して居る首腦者は、いづれの場所に於ける戦闘に於いても、豫期の半も効果は收められぬであらう。また好個の戦士を以て滿たされた軍隊に成ると、萬事敵軍より遙か不利益な位置に立つて戦闘を開始しても、何時の間にか形勢を一變して、敵を死地に陥れるやうな働きをするが、いづれの方面より見て

も不完全な軍隊に成ると、初めは此方が十分有利な地位を占領して居つても、力の足りない爲にこれを利用して、敵に痛撃を加へることの出来ぬばかりでなく、終には其の地點から逐拂はれて、あたら

◎寶の持腐

と云つたやうな馬鹿を見るであらう。また機敏勇敢なる士卒より成り立した軍隊になると、設令指揮者は斃れても、我れは我れにて一步も退かず、敵に向つて勇進肉薄し、その終局には大勝利を得るやうな場合も稀でないが、これに反する弱蟲共の軍隊になると、味方の形勢が少しも逆境に傾きかけて來ると、指揮者の指揮に従ふ勇氣さへなく成つて居る。斯くの如き軍隊を操縦して戦闘を開始しなければ成らぬやうな目に會ふ人は、

◎是れ眞に不幸なる人

てなければ馬鹿である。こんな蕪人形を見たやうな士卒ならば、設令幾百萬人居らうとも役には立たぬが、勇敢精練なる士卒であれば、その數に於いては、設令何んなに少數であらうと、優に戦闘は出来るであらう。斯くの如き好個の士卒を引卒して、これから一合戦して見やうといふやうな人は、

◎是れ眞に幸福なる人

てなければ智者である。さらば如何にすれば、我が部下に斯くの如き良兵士は得られるかと云ふに、それは、不○斷○の○訓○練○が○大○切○である。平素彼等に十分なる食物を與へて、十分に運動を取らせ、先づ健全なる身體

を養成させると同時に、その首腦者たらん人は、常に彼等を我子の如く愛撫して、戰術的に將た精神的に彼等の心身を訓練しなければ成らぬ。若し首腦者たらん人にして、平素この大準備を怠つて居たならば、彼等の配下は悉く

◎怯夫弱卒

に成るであらう。その首腦者たらん人にして、平素この大準備を怠つて居つて、いざこれから戰鬪といふ場合に臨み、我が配下の士に十分の活動を期待し、その任務に堪へぬからと云つて、罪を部下の士に歸すのは、是れ抑も間違ひ切つた話であらう。かるが故に、健全なる軍隊を養成せんとする國に在つては、平素皆この準備に努めて居る。凡そ戰場に於いて勇敢機敏に奮戰する兵士の必要な事は、略上に述べ

た通りであるが、これを今日の我が實業界に於いて見たならば、何うであらうか。我が國今日の實業界に於いても、

◎實業的事務家

としての好戦士の必要且つ大切なることは、軍隊に於ける好戦士の必要且つ大切なることと同様である。軍隊に於ける首腦者の人員には、略、一定の數があれば、差支のないやうに、我が今日の實業界に於いても、亦その棟梁たるべき人には、餘り多くの人物は要しない。これには一定の限りがあつても、差支はないが、その配下となつて十分に活動する實業界の好戦士に至つては、多々ます。必要である。比例の上から云ふ時は、我が國今日の實業界に於いては、兎に角その首腦者たるべき人は、寧ろ世間にあり餘る位であるが、

◎實業界の好戦士

として、善くその任務に堪へ得る人は比較的少數である。然るに軍隊に於いて太將ばかりが多くても、その指揮に従つて力戦健闘する肝腎な好戦士が十分揃つて居なければ、戦闘その者の目的を達する事が出来ぬやうに、我が今日の實業界に於いても、事業家その人の命令に従つて勇敢に忠實に好く戦ふ人が無かつたならば、起業資本も十分にあり、計畫にも抜目はないとして見た所で、その事業たるや斷じて充分には行かぬであらう。されば今日直下の我が實業界に於いては、事業に將帥たるべき人よりも、彼等を助けて充分にその事業を成立せしむる所の力を有して居る將校以下の多數の良兵士を求めて居る。

と云ふが何處の店舗、何處の會社に行つて見ても、實業界の好戦士とし

て、能くその任務を盡し得て居る者は多いか少いかといふ事を調べて見たならば、心ある人は何人もあらず。眉を蹙めるであらう。若しこの社會に於ける達人に就いて、彼等——今日の我が實業界に於ける戦士の批判を求めたならば、彼は恐らく「一般に懦夫弱卒を以て満されたり」と云ふであらう。さらば實業界に於ける

◎勇士猛卒

とは何んな人物だといふと、彼は先づ第一に其の業務に忠實でなければならぬ。同時に又勤勉家でなければ間に合はぬ。以上の二ツを備へて居れば、實業界の好戦士と稱することが出来るかといふに左様でない。以上の資格を備へて居る上に、彼は猶戰場に於ける勇士の如く大膽でなければ成らぬ、機敏でなければ役に立たぬ、同時にまた忍耐力

にも富んで居なければ成らぬ。機智頓才も縦横に走らなければ成らぬ。が就中實業家としての精神氣魄に富んで居なければ成らぬ。この外に尙實業界の勇士としては、萬事最も正確に敏活に事務を處理する手腕を備へて居なければ、彼は決して實業界の好戦士とは云はれない。「そんなに色々注文されては、實業界の好戦士として、その任務に堪へ得るものは恐らく一人もないであらう」といふ人もあるかは知らぬが、實業家としての一通の智識を備へて居る上に、少くも以上の要素を兼備して居る者でなかつたならば、その首腦者を補佐して充分に事業の効績を擧げさせることは出来ぬであらう。然るに

◎今日の青年事務家

は何うだといふと、口の人は多いやうだが、實行の人は洵に少ない。言

ひ換へて見れば、口頭で巧者に理屈を列べる人は多いが、實地に働いて効績を擧げ得る人は洵に少數である。殊に今日の青年事務家に取つて最大なる缺點の二ともいふべきは、事業家としての精神氣魄に乏しい點である。即ち我が勤めて居る店舗なり又は會社なり順境に立つて營業して居る場合には、何うか斯うがして自分の職員を塞いで居るが、いざ逆境と成つて來た場合には、スグに顔色を眞蒼にして了つて、其處で主人若しくは會社の爲に一働きする所の話でない、早早其處を逃出して、他の安全な處に籍を移さうとする。實に見限り果てた根性ではないか。これをしも

◎實業界に於ける懦夫弱卒

と謂はずんば將孰れをか然云はんである。順境の勉強家も宜しいが、

男子は逆境の勇士として世の中に處し能ふ者で無ければ役に立たぬ。ところが順境の勉強家は世間にいくらか知らぬが逆境の勇士に至つては眞に少ない。逆境の勇士たること能はざる店員若くは社員を率ひて仕事をしなければ成らぬやうな人は、前の勇士なき軍隊を引率して戦闘をしなければ成らぬやうな將帥と同様に、是れ眞に不幸なる人でなければ馬鹿である。店運若くは社運の隆盛なる時に在つては兎も角も、その店舗若くはその社に於いて、一朝事ある時に際し、何等の奇策なく忍耐なく、勇氣なく、實行なくして、直ちに逃出して了ふやうな店員若くは社員であつたならば、彼等は幾人群つて居らうとも、それは土偶を列べて置くやうなものといふ大切な場合には、何んの役にも立ちませぬ。斯くの如き店員若くは社員を引率して、何か大仕事を仕やうといふのは、初めから間違ひ切つた考へである。その首

腦者たる人にして、早く此處に氣が着いたならば、平素十分に注意を拂つて、將來探つておのれの部下と爲すべき

◎好戦士の養成

に努力一番することが、是れ何よりの急務である。平素此處に心を用ゐず、この大準備を怠つて居つて、いざといふ大切な場合に臨んで、我が部下の働きに多くを期待し、實効の擧らざるを見て、我が部下の無能を責めるのは、抑も無理な注文である。彼等を養成するには、何うすれば好いかと云へば、その第一に位すべき要件は、今日のそれよりも最少し高く給料を拂つて遣ることが、是れ何よりの急務である。世は何人に限らずその日の衣食に窮しては、何んにも出来るものでない。早く此處に着眼せず、黄金を銅の代價で買ひ取らうなどといふやうなケチな

考へを懐いて居つたならば、實業界の好戦士とも稱するに足る有爲の士は、何時まで待つてもおのれの部下には一人も出来ぬであらう。

九 余は花嫁に何事を語りし乎

左の一篇は、目下或る會社に勤めて居られる某氏の談話にかかるものである――

あまり早く妻帯するのも何んなものであらうかと、實はこの夏まで獨身で居たやうな譯でしたが、母が切りに氣を揉んで、『お前も今年是最う三十二ぢやないか、何時まで獨身で居て私に苦勞をさせるのか、最う強情も好い加減にして早く一人貰つたら好いだらう』謂はれて見れば無理もないので、早速心がけて見ると云ふと、この節

◎細君の志望者

の多いには、實に驚きましたねえ！要するに、これは近頃生活難の聲の高い爲に、妻帯を手控する者が澤山出来た爲でしやうよ。

ちよつと洒落半分に二三ヶ所口をかけて見るといふと、一人娘に聲八人といふことは古くから聞いて居りますが、僕のやうな醜男子に細君の候補者一時に拾五人と註せられたには、前途大いに有望に成りましたねえ！はッはッは……

それが僕の男前にても惚れて來たと云ふ譯ならば、君にも一杯奢らねば成らん所ですが、正直な所、事實は全く左様でないです。實際驚くべき現象ですから、内内研究して見るといふと、矢張前に申した近頃の

◎生活難の聲

に聞怖して、全く男の方で妻帯の儉約をする影響らしいです。而て

見ると今日の廂髪連中の内幕は實に憐れむべきものではありませんか。さて拾五人の候補者に就いて僕はいろ／＼聞いて見ました。すると間に立つた人が、一精しく話をしてくれましたが先づ年齢に就いて研究して見ると云ふと、一番若いので十七位から中には早三十近くに成るのもあります。『こんなのは不具者が、さも無ければ多分』

◎處女の洗濯物

『であらう』と思つて中人に就いて吟味して見ると云ふと『不具所かたはの話が、色こそ少し襪めかかつては居るが實に非常頗る、モット強い副詞を付けて形容して遣りたいやうな美人』と真面目に成つて言ふのです。『それぢや何うして、こんなに嫁期を過ぎたのです？』

と、これ等の老處女に就いて尙穿鑿して見ると云ふと、或者は『女學校に奉職して居たが爲に』また或者は『餘りに良人を選択仕過ぎたが爲に』また或者は『これまで良縁が無かつたが爲に』など皆各自に一種の曰くは有つて居るやうですが、兎に角妻君の志望者の多い事は實に驚くべき事實です。言ひ換へて見れば、何んな細君でも好きなのが幾何でもあ

るです。僕は以上拾五名の候補者の中で、その何れも氣に適らぬといふ譯ではない、寧ろ其の選擇法に就いて迷つた爲に、暫く返事をせず居りますと、媒介を依頼された人人の方では氣を柔んで、

『何うだ、先日來の候補者は一人もお前の氣に適らぬか、まだ／＼外にも嫁入口を頼まれて居る候補者が幾人もあるぞ』と云ふ譯です。

此方は大逆上おぼのぼせに逆上せて了つて、兎角返事を延して居ると
 『つまりお前は何んなのが好い？こんなのを欲しいと云ふ所を明明地に云つて下されば、スグにも捜してお目にかける！』
 餘り放棄つて置くのも穩かてない譯ですから、僕は斯う云ふ返事をしたです。

『容貌普通、教育も亦普通、ただ能く』

◎妻としての任務

に堪へる者が欲しい。いかに才色無双の女でも、身體の虚弱な者や、お轉婆娘は御免を被る。僕は色よりも心を取り、才よりも女子としては從順を好む。何うかその邊で然るべく御周旋を願ひたい！』
 すると早速一人の媒介者から、

『宜しい、萬事承知致しました！おそくも一兩日中に……』
 と云つて寄來したですが、直様見合といふ事に成りました。
 するとまあ僕は勿論氣に適らぬ譯でもなく、向ふも異存は無かつたのか、但しは又『この節は容易に貰ひ人が無いので、餘り婿えらみをして居つて、今日世間にいくらかもある』

◎老處女

にても成つては困る！』とでも思つたものか、兎に角僕の所に喜んで遣つて來ると云ふ譯に成つたです。
 何しろ火急に式を擧げる事に成つたんですから、家は疊の表更一ツする暇も無かつたです。それでまあ簡便法を取つて、式は安上りに而も最も神聖に某の神社で擧げました。

それからまあ花嫁を家に伴れて来たといふ譯ですが、僕は先づ花娘に、我が家先祖歴代の位牌を禮拜させまして、スグにその場で、『僕の妻と成つた以上は、一家の幸福と繁榮とを圖るが爲に、お前は左の箇條を誓つて嚴守しなければ成らぬ。若し出来ぬとあれば、この儘歸つて貰うより仕方がない！』すると花嫁は從順に、『その箇條を一通り承りたうございます！』と来た。

『宜し』と云ふので、僕はスグに其の箇條をザツと話して聞せました。一、徳性の涵養に力を盡す事は云ふまでもない事として、お前はこれからお前自身の攝生、同時に一家の衛生に向つて、及ぶ丈注意を拂はな

げればならぬ。何故だと云ふと、その身多病にして一家の主婦たる事は是れ實に悪むべき

◎女子の罪惡

である。いづれの點から見ても此事は、一家の運命をして衰退せしめる原因に成る。主婦の多病な家を見るといふと、その家には何時も不幸不愉快な氣が充満して居る。斯くの如き家は斷じて繁昌せぬ！私には最もこれを恐れる！何うか十分に注意して貰ひたい！平生の不用意からして、主婦以外に病者を出すのもほぼ同一の不幸になる、これも何うか十分注意して貰ひたい！

二、毎日何うか笑顔をして居て貰ひたい。少くも泣ッ而やふくれ面丈はして居て貰ひたくないものである。世間には何時もその家に行つ

て見ても、主婦の顔に涙の痕あり、若くは一種陰鬱な氣を含んで居り、或は朝ツはらから『私共では今朝も夫婦喧嘩を遣りました!』と云ふやうな顔をして居る細君を見ることが無いでない。併しながら斯くの如き家の運命は、何時も冬枯の野を見たりやうに寂れて居る。善善注意して居て貰ひたい。

三、世間には善く妻帯してから友人間などに評判を貶す男がある。換言すれば『彼奴は鼻をもつてから、太くしみツたれに成つて来た!』などと云はれるやうな男がある。何うか交際と云ふ事には最も重きを置いて居て貰はなければ成らぬ。

四、何事も適度にして置いて貰ひたい。即ち節儉と云ふ事も、勤勉と云ふ事も、その他一切適度にして貰ひたい。更に言ひ換へて見れば、何事にも無理をして貰ひたくない。何んとなれば無理は決して長くは

續かぬ。何事をするにも常にこの考へを有つて居て貰ひたい。

五、何事に限らず、今直ちに爲し得る事は、即座に遣つて貰ひたい。これは後に、これは又その中にと云ふやうに、今直ちに出来る事を、だんだん後にくと送るやうな家は、終には爲すべき仕事を以て大混雜を來す日が何時か一度は來なければ成らぬ。斯くの如き家は、萬事共に不規則不規律に成つて行くので、到底健全なる家庭として世に榮ゆべき運命はない。大いに注意して貰はねばならぬ。

六、萬事常識を基礎にして遣つて貰ひたい。何事をするにも常識に訴へず、僅の面倒を厭つて、出鱈目に事をするに云ふと、火に向つて石油を打ツかけるやうな事を仕出して、人に嗤はれる丈ならば好いか、その爲飛んだ大火傷をするやうな事がある。不斷善善その心がけて萬事を處理して貰はなければ成らぬ。

七、一旦人に頼まれた事は及ぶ丈忠實に遣つて貰ひたい。出来ぬ事は初めから断然断つて差支は無い。さも無くして安請合をすると云ふと、我れを苦めると共に人を苦め、我が信用を失ふと共に人には却て損害を與へるやうな事になる。これ等の事も平素善善嚴守實行して貰ひたい。

八、萬事誠實の念を本位にしてやつて貰ひたい。人は唯夫れこれあるかな！他に對するにも我に對するにも虚偽は決して我が身を安全にするの道でない。至誠！至誠！何うか萬事をこれによつて遣つて貰ひたい！

と云つたやうな事を約二十ヶ條も命じましたので花嫁君は大いに閉口するであらうと思ひの外、可憐なる彼の女は僕の前に兩手をつかへて、

『一仰せに従ひます！』

と従順に出ましたので、僕は大きに頼母しく思つて居りますと、今度は花嫁の方で僕に向つて幾多の箇條、一家の主人公として守るべきを提言しました。併し、それは別問題に亘りますので、僕が此處でお話する譯には参りません。若しお思召がありましたら、それは何うか妻にお聞きを願ひます。

(十) 商店繁榮の基礎

世の中は何事を經營するにも一筋縄では行かなく成つて來た。商賣の道などは特に左様であらう。これを昔日の時代に見るも

◎ 商家繁榮の工夫

は、各商家に於いて、皆そは、く拔目なく講究せられて居たに違ひないが、有らゆる廣告術を利用し、商品の裝飾などにも、成るべく顧客の目を引着けやすいやうな漸新なる意匠を凝し、その他總ての點に亘つて、我が店繁昌せよかしと火花を散して競争する今日の状態ありさまに比べたならば、昔の商家繁榮法などは、何れの方面より見ても、極めて幼稚なものであつたであらう。

それ等の點に於いては、昔は到底今日の敵では無かつたであらうが、人に長短優劣のあるが如く、時代にもまた長短優劣があつて、有らゆる商賣の方法に於いては、昔が今に劣つて居たに拘らず、その繁昌の度に於いては、兩者の間に何等の差違をも認めることの出来ぬのは何故だらう。『それは一般に幼稚であたから』と云つて了へばそれまでの事であるが、この間の消息を眞面目に講究して見たならば、何か其處に

◎時代の長所

の潜んで居た事實を發見するであらう。箇中の消息に就いて當時幾多の實驗を有する一老商は語つて曰く、——
『そりや最う昔の商賣は今日の商賣に比べて見ると、樂は確に樂でしたよ。第一今日のやうに便利な交通機關はなし、また今日のやうに續々と新しい商品が出来る譯でも無かつたですから、商人同志の競争と云つても、今日の状態に比べれば、實に何んでも無かつたです。それぢや昔は商人同志の間に、別に

◎商賣上の競争

は無かつたかといふと、いづれの時代にしろ寢て居つて飲の食へる道

理はありませぬわなア！矢張商人同志で互に生血を滴し合つて勉強したものですよ。

併し、廣告の仕方などと云ふものは、今日のやうに驚く程進歩しては居なかつたので、その邊は大きに樂な所があつたです。兎に角今日は競争が激しい、實に壽命の縮まる程烈しい。つまりは人口も昔よりは多く成つた代りに商品も澤山出來て來たが、その割合に需要の少ない所から、こんなに商賣が遣りにくく成つた爲でしやう。その爲諸方で音楽隊まで使用して

◎これでも賣れぬか、これでも賣れぬか

と云ふやうに嘸し立て騒ぎ立て、その他いろいろ新しい工夫を凝して、『これで繁昌せぬ筈はない！』と云ふまでに奮發はするものさしてその

日その日の實際は何うだと云ふと、何うも昔のやには行かぬらしい。またそれ程商賣に勉強して居りながら、否それ程商賣に拔目なく勉強して居るやうに見えながら、何處の店でも店員諸君の商賣上の腕前や

◎客扱の方法

などは、何うも昔の番頭さんや小僧連中の客を外さぬ腕前に及ばぬやうに思はれるのは何故でせう。

相當な文明的教育まで受けられて居られる今日の立派な店員諸君にして、第一自家職務上の勉強振と云ひ、また商賣上の手腕と云ひ、多寡が昔の寺小屋あがりの謂はば無學文盲なる番頭さんや小僧連中の働さに及ばんとあつては、これ實に

◎研究すべき一大問題

であらうと思ひます。私共のやうな舊式の頭に訴へてこの問題を判断すれば、今日の立派な店員諸君は、理窟にかけては學者でも、實際に當つては無學である。これも確に今日の店員諸君が、その商店商店に取つて、最も信頼すべき

◎實戰の勇士

としては、多年修養練磨の結果、確然たる實際的能力を有して居た前垂^{まへたれ}がけの連中に及ばぬ原因にも成つて居るであらうが、それよりもまた他に一の重大なる原因があつて、斯くの如き相違を生ぜしめるのであるまいかと思はれます。

それは何かといふと、昔と今日では著しく店主と店員との關係が變つて参りました。然らば店主と店員、即ち雇者被雇者の間に於いて、昔と今では如何なる點が著しく變つて來たかと申しますと、昔日に於ける

◎雇者被雇者の關係

は、謂はば親戚關係であつたものが、今日では俄然一變して、店主が店員を使ふには、多くの商家に於いて、皆月給制度に成つて参つたこととあります。これが即ち今日の立派な教育(昔に比すれば)を受けられて居る店員諸君にして、商人としての働さが、昔の無學な番頭さんや小僧連中に劣るやうに成つたのではあるまいかと思はれます。

それは何故かといふと、昔は主家の店員として豫定の年限を勤むればちやんと其の店の暖簾^{のれん}を仕分けて貰つて、獨立の出來るやうにして貰

ラ恩典があつたので、普通の了簡を有つて居る者であれば、何人もケチな奉公人根性を出さずに主家の盛衰を以て直ちに己れの盛衰と心得て、各自主家の爲に一生懸命に努力奮勵したものであります。今日では店員を主に月給で使うと云ふことに成りましたので、雇者と被雇者の間に於ける関係は、昔と違つてまるで他人附合に成つて参りました。その弊害として、雇者は昔のやうに被雇者を子視せず、被雇者も亦雇者を父視せぬやうに成りましたので、勢ひ其處に奉公人根性も出て來ると云ふやうな順序に成つて参りましたのは、兩者の爲に實に遺憾千萬な次第でございます。

以上を尙精しく申して見ますれば、雇者の方では、少しでも安い月給で被雇者に多く働かせやうとし、被雇者の方では、少しでも高い月給を雇者に支拂はせて、成るべく少なく働かうと云ふ了簡に成りましたので、

その邊の消息は昔とはまるで變つて來たやうに思はれます。更にこれを言ひ換へて見ましやうならば、昔は雇者と被雇者の氣が旨く一致して居りましたので、雇者と被雇者の別なく、各自皆骨惜みをせず、我が店の繁榮を圖つたものであります。今日では雇者と被雇者の関係が一變し互に其の情誼が薄く成つて参りましたので、兩者の間に於けるこの密接なる関係が次第に薄らいて参りました。これが今日の商店の

◎充分に繁榮せぬ重大なる原因

の○一○で○あら○う○と思○は○れ○ま○す○。事○は○總○て○氣○を○以○て○成○る○も○の○で○ご○ざ○い○ま○す○。假○令○少○し○は○困○難○な○事○で○も、そ○の○局○に○當○つ○て○事○を○遣○る○人○の○氣○合○が○旨○く○揃○う○と○云○ふ○と、氣○の○勢○で○出○來○ぬ○事○も○遂○に○は○成○就○す○る○や○う○な○勘○定○に○成○

りますが、上下の氣合が旨く相和合せぬといふと、譯なく出来る事も遂には破れるといふやうな事に成つて参ります。商人が商賣をするのは、兵士が戦争をするのと同じことです。例へば此處に一戸の商店を張つて、何商賣なり始めやうと云ふには、何うしても雇者と被雇者即ち店主と店員との氣合が旨く一致して居なければ、到底良好なる結果を擧げる譯には参りません。此處に一個の軍隊があつて、いざ敵に向つて戦鬪を開始しやうと云ふ場合に於いて、いかに一軍の首腦者ばかりが氣を揉んで見た所で、部下の兵士の心が皆區區に成つて居つて、善く首腦者の命令通りに力戰奮闘しなかつたならば、到底十分なる捷利を占める事は出来ぬでありまじやう。店頭に於ける我我

◎商人の戦争

も亦實にその通りでございます。いかに店主ばかりが氣を揉んで、自家商店の繁榮を圖つて見た所で、店主の眼の届かぬ所には、その方策が行はれなかつたならば、到底その目的を達することは覺束ないでありまじやう。若し斯くの如き不熱心なる店員を引率して、自家の商店を繁榮せしめんとして見た所で、骨折損の草臥まうけに終らなければ成りません。

然らば如何なる店員を引率して商戰に従事すれば、善く自家の目的を達するか。これは今日店主たるべき人人の、大いに講究すべき問題であらうと思ひます。例へば戦争をするにしても、少し味方の旗色が悪ければ、直様尻に帆をかけて我れ先にと逃出すやうな怯夫弱卒のみを引率して居つては、假令その將軍たるべき人に如何なる手腕があらうとも、斷じて戦争には勝たれぬでありまじやう。これに反して將斃る

るも卒能く進むと云ふやうな

◎熱烈勇敢なる部下

を引率して居たならば、假令その兵員は少数でも、花花しき一戦を試みる事が出来るでありましやう。

我我商人の側に取つてもその通りでございます。主家商店の何うなり斯うなり店舗を張つて居る間は、その店に居て月給を取つて居るがいざ少し暖簾の色が怪しく見えて来た」となると、直様逃げ仕度をするやうな店員では甚だ頼み少ない次第でございます。平素斯くの如き不熱誠なる店員を引率して、大いに事を成さうなどは、刃のない斧をを以て大木を伐り倒さんとするやうなものでございます。然らば何んな店員を引率して事に當れば、能く其の目的を貫徹することが出来るかと云ふと、

◎店主と一心同體の男

に成つて、善く其の商店の爲に奮闘力戦し、若し其の商店にして繁榮せねば、『我が店は何故に繁榮せぬか』と云ふ原因を發見し、我が店の運命をして旭日昇天の域に進め得る位の工夫力あり熱誠あり、併せて其の實行力ある店員か店に控えて居たならば、假令その人数は五指を屈するに足らぬとしても、店主その人は何んなにか心強いことであるましやう。併しながら今日の世に於いては、『斯くの如き店員は何れの店舗に幾人在りや』と云ふことに成ると、いかに世間の廣い人でも、俄にお答は出来ぬであらうと思はれます。其處に行くと

でしたよ。一旦主人を取ると云ふと、『忠臣は二君に見えず』の大決心を以て、我が奉公中に於いて假令、我が主家が何んな非運に遭遇しやうと、彼等は皆頑として其の店頭を一步たりとも退かず、店主と運命を共にして、何處何處までも悪戦苦闘し、最う何うしても人間の工夫や實行では行かぬと云ふ所に成つて、その店頭を整列して、同じ枕に主人と共に潔く算盤腹を切つたものです。

さて何が故に、等しく是れ店員にして、昔と今では斯くの如き相違を生じ、今日現在の洋服を着た立派な連中は、非運と見ては舊主を棄てて顧みぬに拘らず、昔日の前垂がけの野暮臭い連中は、何處までも舊主を慕つて運命を共にしたかと云ふに、その最も大なる原因の伏在して居る

◎昔の店員は武士的

所は昔と今では彼等に對する待遇法が一變して來た爲ではあるまいかと思はれます。

戦争をするには、部下に幾多の精兵を引率して居なければ、目覺ましい活動を遣つて見る事は出來ないと同じやうに、商店を開いて商業をしやうと云ふにも、我が店舗に幾多の

◎商業的良戦士

が控えて居なければ、繁榮も蠶もあつたものではありません。若し、自家商店の繁榮策を講ぜんとする人があつたならば、先づ我が店舗を守護せしめる勇士精兵を養成することが、これ何よりの急務であらうと思はれます。私の實驗上よりこれを陳ぶれば、商店繁榮の基礎は、一に全く店員諸君の奇智に在り、勉強に在り、就中、我が店の信用を思ふ

と云ふ

◎誠實の念慮

に在ると思ひます。この根本的改良を加へずに、店の飾りをいろ／＼に變へて見たり、世界の店舗は我が店のみと云ふやうな廣告などに愛身をやつして見た所が、肝腎な本尊たる我が本城の店舗並びに店員が勉強誠實の念に缺乏して居たならば、その商店の世に繁榮せんことは甚だ以て覺束ない次第であらうと存じます。

然らば如何にすれば、店員は店主その人に心服するか、その邊の工夫並びに實行が、これ何よりの商店繁榮法であらうと存じます。店主その人にして、我善く我が店員の心をして我に心服せしめ得た時は、是れ即ち

◎我が店舗の繁榮すの時

であります。論より證據、店主と店員の心とが區區に成つて、店員の間に不平の聲が盛んに聞えて居る店舗にして、世に繁榮して居る所は、先づ以て實に甚だ少數であります。斯くの如き所は、假令、現在に於いては猶榮えて居るとした所で、未來の運命は實に頼み少ない次第でございます。さらば何うすれば、彼等は我れに心服するかと云ふと、彼等に對する待遇は、昔日のやうには行かぬまでも、今少しく思ひ切つて、我が店の爲に働く人人に利益を分配することが肝要であります。いかに忠實善良なる人間にしても、始終空腹を抱へて居ては充分に活動することは出来ません。然るに概して今日の店員は、日常の衣食に於いてその多數は

◎痛切なる窮乏

を感^じて居^りま^す。店主の側では『今日ではそんなに彼等を優待する譯には行かぬ』と云はれる人もあるか知れませんが、おのれ一人をのみ利せんとすれば、部下は反^くに極^つて居^りま^す。今少しく彼等に餘裕を與へなかつたならば、自家の店舗は衰ふることもあるも、斷じて榮えるうな事はあるまいと存じます。多寡が店員の給料位にケチ／＼して、彼等の衣食住に痛切なる缺乏を感ぜさせるやう了簡では、おそらく繁榮の途は開かれぬでありまじやう。『先づ汝の店員を優遇せよ。是れ

◎商家繁榮の大秘訣

なり』とは、或る老練なる老商の常に人に向つて訓へる所でありますが、

ひとり其の人ばかりでなく、多少昔日の商家の消息に通じて居る者ならば、皆同感であらうと存じます』

この言或は大いに然らん、記して以て店主諸君の参考に供す。

(十一) 余が落魄せし原因

人あり、彼の過去に就いて語つて曰く。僕は本年最早四十三歳です。世の中を眞面目に渡つて來た者であれば、今が丁度男の稼ぎ盛で、遅い人でも今頃は、既に

◎運名の基礎

の幾分は据ゑて居る時分です。然るに僕は今日では首も廻らぬ程の窮地に陥り、何んと自救の道も立たぬばかりか、最早神の力を以てする

も救ふべからざる境遇に日夜煩悶して居る次第です。有あり隨まに今日の窮状を申しあげれば、金もなく世間の信用もなく、これと云ふ藝も有つて居らるので、男子として如何にもお耻かしい事ながら、何うして糊口の道を立てやうもありません。最早今日と相成つては、中中以て贅澤な事などは云つて居られません。何んな酷い勞役にも喜んで服しやうと思つて居りますが、目下の逆境に搗かてて加へて身體を太く悪く致して居りますので、何んと致し方もありません。併し、これは皆誰の罪でもなく、謂はば

◎身から出た錆

で、誰を怨む事も出来ません。換言すれば自業自得で、道に背いた我が過去の行を顧みれば、我が今日の運命は、固より斯くもあるべき筈であ

ります。さて我が身は何うして今日のやうな果敢ない末路に迫つたかと云ふ事を話するには、先づこれに先立つ以前の事から一通りお話をしなければなりません。

僕は、元來東北地方の者として始めて東京に出ましたのは、今日を距る事二拾餘年も前の事で、丁度二十歳の春でした。斯ういふやうに段々話を進めて参りますと、餘義なく我が生れた家の事までお話をして、祖先に耻辱を興へなければ成らぬことに成つて参りますが、全體僕の生れた家といふのは士として相當の門地を有し、豊かとは行かぬまでも、決してその日に困るなどと云ふやうな家では無かつたのです。

僕は一人子で、非常に親に寵愛せられ、幼少の時などは、殆ど暴い風にも當てられぬ程大切にそだてられました。その上に、小供の時は人に神

童などとまで云はれた位で、学校の成績は何時も同窓の群童を抜いて居たので、

◎彼の子は今に偉い者になる

などと云つてひどく望みを屬されて居りました。勿論その頃はまだ自分で才を誇るなどと云ふ事はありませんでしたが、たとひ世辭にもせよ、世間の人に我が子は偉いと褒められて見れば、親の心に取つては百萬の黄金にも勝る思ひがしたものだと思えまして、『何うかして我が子に十分立身をさせたいものだ』と云ふ考へが、始終心にあつたものだと思えます。

僕はその後小學校を卒業し、中學校も人に負けずに卒業したのは、丁度十九歳の夏でした。親の喜自分の満足、その時の嬉しさは未だに忘れ

られません。さて小學時代、中學時代を通じて、僕が勉學の仕方は何うであつたかと云ふと、小學校の間は兎も角も、中學校に入つた後は、誰を見ても皆一生懸命に勉強して居つたが、實を云ふと僕は勉強する時間よりも、無駄に遊ぶ時間の方が遙に多かつたのです。それで試験の成績は何うだといふと、一生懸命に勉強する他の學生よりも、怠惰漢なまけものの僕の方が何時でも遙に優等で、試験と云へば皆ビク／＼して居るのに、僕は屁とも思はんでした。だから『君は偉い！』と人にも云れ、自分も大いに我が才を恃むやうに成りました。まだ小僧の時代からしてこんな心に成つたのが、實は將來

◎身を減らす原因

に成つたので、悠に小才などを有つて生れて來なければ、今のやうな悲

慘極まる末路に遭はずに済んだであらうものをと、今では時時下らん愚痴をこぼすやうな事も無いではありません。

中學校を卒業した後は法律を遣つて、行行は大政治家にても成らうと云ふやうな考へを起し、早速先づ親父に相談をして見ると云ふと、『我が子は偉い、屹度物になる！』といふ考へを抱いて居るので、『ウンそれは至極好からう』と云つて、一も二もなく承諾してくれました。親の許諾を得たと共に、僕は最早既に天下の大政治家にても成り得たやうな意氣込で、その翌年の春に三人の同窓生と一緒に上京したのです。

伴の二人は眞面目な男で、これから何處までも堅く學問をしやうといふ質、僕とてもその頃は、『東京に出たならば、これから一番大いに勉強して、屹度目的を貫かう』といふ精神で上京しました。伴の二人は何方も僕よりは年長で、一人は醫者に成ならうといふ目的、他の一人はこれか

ら大學に入つて、大いに工學を研究しやうと云ふ目的でした。僕が

◎第一の缺點

は、既○に○その○時○分○か○ら○何○ん○で○も○物○事○を○輕○く○視○て○幾○ら○か○才○氣○の○あ○る○儘○に○才○を○頼○ん○で○人○を○侮○り○人○を○馬○鹿○に○す○る○傾○向○が○あ○り○ま○し○た○。○と○こ○ろ○が○僕○と○違○つ○て○他○の○二○人○は○何○處○ま○で○も○眞○摯○着○實○な○る○質○の○人○間○で○東○京○に○出○る○と○共○に○直○様○學○校○を○撰○ん○で○入○學○し○、○一○生○懸○命○に○本○と○首○ッ○引○を○始○め○ま○し○た○が○僕○は○左○様○で○無○か○つ○た○で○す○。○『○何○、○そ○ん○な○に○あ○わ○て○る○事○は○な○い○』○と○云○つ○た○や○う○な○横○着○極○ま○る○考○へ○で○、○一○月○餘○は○ブ○ラ／＼○と○諸○方○を○見○物○し○て○遊○び○廻○り○、○上○京○後○二○ヶ○月○目○に○、○そ○の○頃○神○田○の○小○川○町○に○在○つ○た○東○京○法○學○校○と○い○ふ○法○律○學○校○に○入○り○ま○し○た○。

さて愈よ法律の研究を始めて見ると、兎角口先で理屈を云ひたがる質

の僕に取つては至極面白い學問で、その學問がひどく気に入りましたので、一時は思はず知らず大いに勉強しました。その後二年間ばかり眞面目に遣つて居る中に、僕の頭の裡に法律思想が最早一通り出来て來ました。同輩と下宿屋の二階で議論を戦はして見ても負けぬ。またその頃學校には土曜日の晩毎に討論會があつたものですが、其處に出てしゃべつて見ても才氣縦横に風發し、一步も人に譲りませんでした。古人も既にこれを戒め、自己の實驗に徴して見ても、怒に

◎小才の利く人間程危険な者は無い

特に年少の頃に小才の走る者で、將來碌な人間に成つた例はありませ

ん。當時僕は先づそんな調子でありましたので、『彼奴は出来る、才子だ！』

と云ふやうな評判を學友の仲間何時しか傳へられるやうに成りました。ところがこれがまた年少者の僕に取つては悪魔の呪で、そんな評判を立てられると共に、益す奮つて勉學する氣には成らずに、

◎おれは偉いぞ

と云ふ氣に成り、肝腎な學問は其處退けにして、直ちに悪い遊びを始め、親を騙して金を取つては、子として實に相濟まぬ振舞をして居りました。其の天罰が直ちに報つて、ドンと學校の成績でも悪くなれば、又大いに顧みる心が起つて、その爲に眞面目な人間に成る事が出来たのかも知れませんが、小才子の身を誤るのは、誰も何れはこの邊で、不斷は勝手氣儘に遊んで居り、ソラ試験があると云ふ間際に成つて、ホンの一間の間に合せて物の四五日も本を飛飛に覗いて試験を受けて見れば、結

果は案外大當に當つて、「君は旨く遣つたなア！」と仲間の者に云はれるやうな事になる。其處で益す才子を氣取つて、他人は残らず愚物のやうな感じをし、「おれには何んな事でも出来る」と思つたのが、つまり

◎我が今日の不幸を來す道火

に成つたのです。こんな工合で他の學生の半分も苦しまずに學校を卒業し、今度は一番萬一を僥倖して、當時の判檢事試験に應じて見ると何うです、これも見事に及第したてはありませんか。この吉報を早速親許に報ずると云ふと、親に取つてはまだ小供と思ひの外、「今度判事に成つて、何處其處の裁判所に赴任する事に成つた」と聞いては非常な喜び、「金が要るなら何うにても都合をして送らう」と云つて寄越してくれました。

その時などは折返して、「色色準備にかかるから、何うか五六百圓送つて貰ひたい」と云つて遣ると、親は祖先傳來の資を惜まざ裂いて、早速送つて寄越しました。「その金は何にした？」と申しますと、任命後東京に一ヶ月間ばかり居た間に、その大部分は遊蕩の爲に消費して了つたです。

年少者にしてこの味を覚えては、いよ／＼落ちる所まで落ちなければ決して止む止ものではありません。その後任地に赴いて、二ヶ月間ばかり判事の職を奉じて居りましたが、その外形に於いては兎も角も、既に

◎精神的失敗者

としての僕には、こんな嚴正な職務の人として生活する事は、これ到底不可能の事でありました。

僕にして若し眞面目な人間であれば、何處までもこの職務に依つて立

身したてありまじやう。また多年の間熱誠にこの職務に従事して居つたならば、この職業に依つて、恐らく相當な地位も得られたてありまじやう。ところが小才子と云ふ名は、その實忍耐力の乏しい人間の別名で、僕はスグに判事といふ單調な職務がいやになりました。怒に小才の走しらぬ人間であれば、『自分は何んでも遣れると云ふ人間では無いので、何處までもこの職業に依つて身を立てなければ成らぬ』と云ふ氣が出るので、何時までも後生大事にその職務を守つて行くので、これが後日大いに

◎立脚の基礎

に成つて、却て大なる成功を來たすのでありますが、怒に小才の走る僕には左様で無かつたです。

それでは當時何んな氣に成つて、折角得た所の判事の職を棄てたかと云ふと、それは即ち己の才に己の身を斬られた譯で、『何アにこんな窮屈な事をして飯を食はんでも、他に生活する方法は幾らもある？』と云ふ考へて、僅か二年間判事の職を勤めたばかりで早速罷めて了ひました。僕はこの時既に

◎自家の天福

を破つて身の破滅を招いたので、斯う云ふ事が積り積つて、我が運命の幹を痛め、終に今日あるに至つたのです。

さてその後は如何にして我が一身を處したかと云ふと、『最早公職に身を苦しめるのはいやだから、これから一番辯護士にても成つて、自由に世の中を渡らう』と云ふやうな間違つた考へを起し、早速東京に出て來

て、京橋邊に大きな家を借込んで

◎辯護士事務所

の看板を掲げました。これに先立ち國に歸つて、巧言以て親を欺き、それこそホントに有らん限りの財産を悉く金にして二千餘圓調達し、両親は後でスグに呼び迎へると云ふ事にして置いて上京しました。それでその金は何に使用したかといふと、辯護士事務所を開くのに、家の雜作を買つたり、敷金を入れたり、その他色色の準備に七八百圓は使ひました。その殘金はいかに使用したかと云ふと、早速一人の藝者を落藉して、これと結婚した事に就いては、兩親共に一方ならず立腹し、『最早貴様のやうな奴は子とは思はぬ、斷じて親とも思ふな』申として、謂はばまあ親に勘當せられたやうな形に成りました。いや單に形ばかりで

はない、實際勘當せられたのであります。

その後辯護士の方は何うであつたかと云ふと、一月経つても二月待つても三月辛抱して見ても、唯一人の依頼者も遣つて來ぬ。これには少少弱つたです。けれども僕は先天的に非常に人に愛せられる徳を有つて居りました。ところに持つて來て、

◎人に取入一種の秘訣

を心得て居りましたので、早速或る有効な手藝を傳つて行つて、同業者中の大頭連と懇意に成り、二三年の中に段段仕上げて、まあ何うにか斯うにか辯護士として立つて行けるやうに成りました。

その中に追追知邊も出來て來た。就いては事件も殖ゑると云ふ譯で、金の融通なども可なりに利くやうに成つて來たので、これまでとは形

勢俄に一變して、大分仕事に成つて來た。換言すれば福がそろく向きかけて來たので、『此處だ！』機と敏に立廻つて居ると、段段苦が附いて來た。左様だ！僕が丁度三十歳の春に成ると、或る大事件の訴訟に旨く勝つて、始めて一時に

◎一萬五千圓といふ大金の報酬

を得たてす。僕は大きい得意に成つて、『何アに世の中は糞でもな〜』といふやうな暴い考へが起りましたが、これが大した感違であつたのです。この大訴訟事件に勝つと共に、僕は青年辯護士仲間の流行兒に成り、それから後の二三年間と云ふものは、何方へ向いても金が懷中に飛び込んで來るやうに成りました。世は如何なる業務に従ふ人でも、二十代や三十代で、餘り幸運に打附か

ると、それが却つて身を破る基になると云ふのは實際です。否、早く成功したから悪いと云ふ譯ではないが、要するに餘り若い中に幸運に打附かると云ふと大抵の人間ならば油斷をして、世の中を安く見積り、締るべき所で引締らるので、折角獲た魚を空しく取逃し、再び前のやうな幸運には平易く打附かる事が出來るので、年少の成功者は後日必ず失敗するなどと云ふのでありませう。自分の實驗に徴して見ても左様である。この時代に於ける僕は、一時大いに金が懷に集まつて來て、五万圓までは無かつたが、三四万圓は確にあり、加ふるに一方には絶えず大なる収入があつたてす。今日往事を追懷するとこの時代が確に僕の

◎黄金時代

てありました。此處で一番引締れば、第一身も安全で済み、それと共に一方には、金も信用も十分に出来て、今日では立派な生活がして居られたのでありますが、さてその時代に於いては、『何アに世の中は何時もの通りだ！』位の淺墓な了簡で、隙さへあれば待合に入りびたり、獨り酒色に耽けるばかりでなく、同醜相集まつて花を引く賭碁を打つ有らゆる醜事悪行を續けて、金を湯水のやうに消費し、人間として眞に耻づべき事ばかりをして居つたです。

併しそれはまだ、無邪氣に遊んで居た間の事、謂はばこれから悪事に向ふ入口でありました。それまでは好かつたが、その中に不圖した事が動機に成つて、相場にちよいちよい手を出すやうに成りました。初めはホンの慰みに遣つたのが、後にはまるて本職のやうに成り、

◎肝腎な職業は其處のけ

にして賣つた、買つたに愛身をやつし、瞬く間に一時の貯蓄は風に消え行く虹のやうに忽ち無く成つて了ひました。

けれどもまだ年齢は若いし、一方に辯護士といふ職業は有つて居るし、ここで一番奮然として猛省し、正に向つて進んだならば、まだ、樂に回復の途は幾らも就いたのでありますが、血氣に逸つて徒らに猛進し、有らゆる手段を以て有らゆる知人に金を借り、『何うかして！已れ何うかして!!!』と益す失敗の上塗をする中に、最う二進も三進も行かなくなり、愈よ以て戦は全敗、これぢや何んと仕様も模様も無い所に持つて來て、不運なるかな、否、當然の事ではあつたが、僕は終に

◎委託金費消罪

を始め、その他同時に色色の不正な行爲の尻が破れて、遺憾！周囲の人
に成り、服役の期を過ぎて、辛く娑婆に出て来た時は、既に辯護士と云ふ
資格もなく、その他一切我が身に附いて居た處世上の武器を、残らず取
上げられて了つて居りました。
その後といふものは、まるで最う手足を振がれた蟹も同様、何處の誰に
縋つて身を立てると云ふやうな事も出来ず、石あり淵に沈むが如く、唯
最う次第に落魄するばかり！人間も最早斯う成つて了つては、弱いも
の脆いもの、其處に持つて来て、一時、
の

◎酒色に身を持崩した崇

が今に成つて發し、杖に縋がらなければ、道も歩けぬやうに成つたので、
ア、我れながら淺間しや、乞食同様の姿に成り、その頃父は既に死ん
で居りましたので、我れ故に世を泣いて居る老母を頼つて、國に歸つた
時の面目無さは、實に何んとも云へませんでした。

國に歸つて一年ばかり病つて居る中に、母も程なく病ひついて歿しま
したが、謂はば、僕が母の死を早めたやうなものでした。最早幾らも無
い家財道具を賣拂ひ、また上京して、少しばかりの小商を始めて見まし
たが、旨く行かずに資本を摺り、今日では斯う遺つて斯んな古雑誌など
を大道で毎晩賣つては居りますが、利益と云つては一人の口を濡すに
も足りません。

ながらへて甲斐ある身にもあらねども

すてうきものはいのちなりけり

これが今日の僕の實境として、以上が僕の今日までに墮落して来た
経路でございます。

(十二) 實質的人物

ひとり今日に始まつた譯ではない昔から一人前の男として世の中に
立つた人人はいづれも皆實質的人物である。實質的人物といふのは
つまり實のある人間のことで、言ひ換へて見れば、確實なる實行力を具
備して居る人のことである。斯ういふ人は、何んなに多く世間にあつ
ても世間は困らぬ。困らぬ所の話ではない、斯んな人が一人でも多け
れば多い程世の爲人の爲になるのであるが、事實はこれに相違して、古
來實質の人は殊に少ない。是れ即ち實質の人の貴い所以で、彼等が大
いに世の中に持斲される次第である。これに反して、

◎非實質人物

は、時の古今を通じて世の中にくらもあつた。非實質的人物といふのは、
つまり實のない人間のこと、口では假令何んな巧者さうな事を云
つても、いざ實行といふ事に成れば、何んなにも出来ない人の事である。
斯ういふ人は一人でも少い方が世の爲になるのであるが、事實はこれ
に相違して、いづれの國でも、また何れの何代でも、世間は殆ど非實質的
人物、即ち無藝無能の人物に充されて居る。是れ即ち實質的人物の價
値は益す騰貴して、旭日冲天の勢を以て事を爲し、人生の事業に華華し
く成功大成功するに反して、一方の價值は益す下落して、社會の活動場
裡から驅逐一掃せられる所以である。これは昔から我等人間相互の
間に抑壓すべからざる勢力を以て、彼と此とを明かに識別し來つたの

であるが、生存競争の激しい今日では、特にこの勢が猛烈に成つて来て、いかに社交に巧みであらうと、實質的人物にあらざれば、最早到底立身出世せんことは覺束なく成つて来た。昔はヒキで出世が出来た、今日の世の中にもヒキは大いに有効であるかも知れないや、今日の世の中にもヒキで立身する人は世間に随分あるやうだが、さて彼等の未路は何うだと云へば、ひと度はヒキに引かれて世に出ても、彼にして實のな人間であつたならば、これを出世の階梯にして、ひとり我が身の地位を進めることの出来ぬばかりでなく、その現位置を保たんとすに、實に甚だ覺束ない次第である。然るに實質的人物に成つて成ると左様でない。彼に取つてはヒキも糞も要つたものでない。我に充分活動すべき大準備のある上に有力なヒキでもあらうなら、それはまた至極結構なことであらうが、この種の人物に成つて来ると、ヒキは無くて

あのづから立身出世の出来るやうに世の中は出来て居るから少しも氣を揉むことはない。これは獨り今日に限らず、昔から巨人は多く茅屋の中から立身出世をして居る。彼等は初めから有力なヒキのあつた譯でもなければ、金のあつた譯でもない。但し、その何人も

◎ 價値ある實質

を造つて居たので、それが何より有力な立身上のヒキに爲り、知己を作るの媒介に成つて、彼等の身をば天邊までも持上げたものである。其處に行くとき昔から非實質的人物は氣の毒な程弱いものだ。凡そヒキと云つたら世の中に、一國の王侯宰相程有力なヒキはあるまい。ところが生れながらにしてそんな好いヒキを有つて居つても、肝腎な御當人にして非實質的人物であつたら何うだ。その王侯宰相を父にした

先天的の幸運兒でさへ名を成し業を遂げ得なかつた者は古來いづれの國にも少く無かつた。否、否、彼れ等の子孫の大多數は皆無能にして世を終つた者ばかりである。これに由つて觀るも、世は實質的人物にあらざれば存分に立身出世せんことは是れ到底覺束ないものだ云ふことを世の青年者は初めから充分腹に吞込んで人間の事業に着手せぬと將來大いに失望する日があるであらう。若し世の中が口頭ばかりで萬事意の如く成るやうならば誰も苦んで自己の力量を増進する者はあるまい。ところが何うしても世は實質の人で無ければ、我れ一個の人間として到底世に立つことは出来ぬといふことを身に沁みて自覺せずには居られぬので、初めは安く世の中を胸に積つて居た人も終には一番全身に力を籠めて、おを辭ながら今更のやうに奮闘的生活に入るのである。何をなに好い下物があつても空徳利では始ま

らぬ。丁度それを同じやうに何をなに好い出世の機會が遣つて來ても、あのれの腕に實が無ければ機會は何時でも取るに任せて、あのれの傍に長くじつとはして居らぬ。苟くも自家將來の運命如何を思はん人は、何んでも早く自己の手腕を鍛鍊して、實質の人たる事を期するのがこれ何よりの。

◎立身的捷徑

である。古人謂へるあり。將來の運命は『自己の力量如何に存す』と。早くこの言の我等を欺かざるを知つて、我れは飽くまでも實質的人物ならん事を期し、充分自己の才能を活用して、大いに努力する人は、よしんば非常なる立身出世は出来ぬまでも、少くも我は將來一個の完全なる人物として世に出ることは確實であるが、若し個中の注意と實行と

を怠つて、いざこれより實戰といふ場合に臨み、無能にして用をなすに足らざる自己を作つて居たならば、假令何んなヒキがあらうとも、また如何ともする能はざる悲しい運命に陥らずには居られぬであらう。古人天機を漏して曰く、『人物の大小如何を論ぜず、また如何なる業務に従ふ人たるを問はず、人一生の間には、一度は必ず隆運の時期到達するもの也』と。實質の人ならば、我れ直に其の隆運の時期を捕へて、富にもあれ、名聲にもあれ、自己の人生に對する希望を十二分に果すことが出来るであらうが、非實質の我なれば、假令何のやうな好時節來るとも、手を空うしてこれを逸するの外、また如何とも爲す能はず、斯くして終に人生の春に背いて仕舞ふてあらう。されば世に就き、人人に就き、己れに就いて、今日現在を思ふと共に、將來を案ずる人は、盛春の間に骨折つて、少くも將來價值ある己れを造るやうに實行する。斯くの如き眞面

目なる青年は、將來斷じて我が身を誤つやうな憂ひは無いが、ここに心を用ひずして、徒らに貴重なる歲月を徒費濫用し、

◎自治自造の功

を積まずして世間を安く積ると共に、自愛自重せざるが如き愚なる青年の末路は更に危険なものである。昔日の優長な時代に在つては、それ或は口の人で吞氣に世間が渡られたかも知れぬ。今日現代に於いても斯くの如き人にして或は盲く世の中を渡つて居る人もないとは限らぬかも知らぬが、今日世間全體の上から云ふ時は、口の人には既に廢人不具に歸して、世は萬事共に實行の人が専ら勝利を占めつつある。然るに今日の

は何うであるか。世事に疎い我れには善くも分らぬが或る嚴正にして老練なる實業家の一人は今日の青年修養法に就いて近時左の如き批判を下すのを聞いたことがある。

◎青年修養法

「我々が今日の學校卒業生は何うも世の中の實際に疎くも間に合はぬと云ふと兎角若い人の御機嫌を損ずるやうだが實際使つて見ると何うもさういふ感じが時時起るのは遺憾である。人間は唯學問さへ出来れば何んな仕事でも出来ると思ふとそれは大分間違つて居る考へである。實務に馴れる馴れぬは先づ別問題だ。それはまだ學校の門を出たばかりの人君は世事に通ぜぬから駄目だなどといふのは酷である。その邊の消息には自然追追に馴れるであらう。私が此處に今日

の青年は何うも世の中の實際に疎いといふのはそんな意味で云ふのでは無い。それは先づ別問題として

◎學科は第二で第一は品性だ

商人は算盤さへ達者であれば大きな仕事が出来ると思つて居るとこれが又大分間違つた話である。成程商人は算盤づくの所もある。併し今日の世の中ではイヤ昔は尙更左様であつたが善良なる品性を具へて居らねばいくら算盤ばかりが達者でも世間の人が儲けさせてくれぬから困る。要するに人は眞面目でなければいかん。眞面目で實質のある人で無ければ世の衆望は歸して來ぬ。何も決して悪しざまに云ふ譯ではないが今日の學生諸君は何うも學問の仕方が着實でないらしい。言ひ換へて見れば平素沈着な心を以て學問をせず

にその大多數はフハ〜と浮いた氣を有つて、兼ねて學問をして居た
 のてはあるまいかと思はれるやうな事が屢々ある。一步進んで云つ
 て見れば、學校に居て學科の研究を遣る時から、これを眞面目に研究し
 やうといふよりは、試験の間に合せに、つまりトビ〜に胡魔かし半分
 に學問をして來たのではあるまいかと思はれる。若し學生の時代か
 ら、そんな骨惜をして、自ら欺くやうな惡習慣を附けて居ると、習性を爲
 して、世間に出て大勢の前で、さあ來いと腕づくで實地に仕事をす
 合に成つて、スグに。

◎バケの皮が現はれる

から堪らない。私はこれを今日まで多數の學校卒業生に試して見た
 が、學校に居た頃から至極眞面目な考へを有つて、着實に勉強して來た

人てあれば世の中に出て仕事をすする時にも、そつくり其の型で働くの
 で自然と長上の信用を受けて、立身出世の途も却て早く開ける様な譯
 になる。私が多年の經驗に據ると、實質の人は何うも斯ういふ畑に屬
 する人に多いやうだ。ところが學校に居た頃から、人の目を胡魔かし
 て來たやうな人物は、其の多くは何うも兎角口頭ばかりの人であつて、
 世の實務實際には無能である。即ち口では何んでも巧者にいふが、手
 元は空で事務が擧らぬ。然るに何方が多いかと云へば、今日の若い人
 には、兎角口の人ばかりが多くて、手の人が眞に少ない。而も

◎その主なる原因

は何かといふと、學校時代から眞摯着實なる氣象の養成を忽かにして、
 世間は只口頭ばかりで通るもだと思つて、實力の養成に重きを置かな

かつたのが終に不幸なる第二の時代を自ら造つたのであらうと思ふ。ところが世の中は万事とも眞面目と實力との競争である。何うか學生諸君の一考を煩はしたいものだと思ふ』

以上の言悉くは中らずとするも、また以て將來實質的人物たらんとする人人の幾分参考にはなるだらうと思ふ。終に臨みて一言す。實質の人は眞面目であるが、これに反する人はその言語舉動ともに不眞面目である。斯くの如き人はまた勢然らざる可からざる理由が大いにあるやうに思はれる。『言多きは品少し』吾人も既に個中の消息を漏して居る。

(十三) 美妻の中毒

これから世の中に出やうといふ青年の腦の蓋を取つて見たならば、中

には何んな物が入つて居るだらう。それを一―根氣に狭み出して見たならば、定めて色色な珍しい物が入つて居るだらうが、その最も大なる容積を占めて居るものは、金持に成らう、出世をしやう、それに何うかして美人の細君を持ちたいものなどといふやうな考へて居るかも知れぬ。或る人はこれを稱して、

◎青年の三大慾望

と云つて居る。また或る人はこの三大慾望に手足の附いたものが青年といふ動物だとも云つて居る。中にも美人の細君と云ふ事は、最も多量に青年の腦裡に満ちて居るかも知れぬ。ところが他の二ツの慾望を満す上に於いて、美人の細君は有効であるか何うだといふ事を研究して見たならば、他の二ツの慾望を満すといふ方面から云へば、

は假令零には成らぬまでも甚だ僅に成るかも知れぬ。これに就いて面白い事を云つて居る人がある。「ここに才學非凡なる一青年があると假定して、若し彼の運命を封鎖しやうと思ふならば、彼に向つて座ながら食ふに足る丈の財産と、住み好き新居と、若い美妻を與へるに限る。この三ツを與へたならば、彼は直ちに意氣沮喪して、最早世の中に何事をも爲し得ぬであらう」と。これと酷く似寄つた實例を聞いたことがある。嘗て或る秀才の

◎美妻の價值

◎青年法學士

があつた。この男は少年の頃から非常に苦學して、終に獨力で大學ま

で遣ツつけ、法學士の稱號を得たのは、最早十年ばかり前のことであつた。彼は眉目秀麗で、非常な才物で、非常な勉強家、在學中も常に特待生の名譽を優に保ち得た位の男であつたので、大いに先輩の愛顧を蒙り、卒業すると間もなく或る大會社の法律顧問といふことに成つた。ところが黄金は何處に行つても黄金の光を放つもので、學校で才子勉強家といふ評判を取つた彼は、世に出た後も同様な評判を取り、年こそ若けれ中中の敏腕家、終にその大會社に重大なる關係を有して居る

◎大頭に睨まれた

悪く睨まれたのだと堪らないが、善く睨まれたのだから有がたい！つまり或る人の口を経て、『何うか自分の娘を嫁に貰つてくれる』といふ事に成つたさうだ。親は金持、その娘と來ては又素敵な美人、殆んど現代

青年の理想通りだ。

けれども大なる抱負ある彼は、安く承知せず、『今暫く妻帯は見合せる』と云つて斷つた。凡そ鼻の下に黒いものの生へて居る動物で、金と美人にふるびつかぬ者はあるまい、ところが彼はきつぱりと斷つた。

◎いよゝゝ見所がある！

といふので、『何うだ娘を貰つてくれぬか。オ、と云へばスグにも洋行させて遣らう、財産の幾分も娘に附けて遣らう、何うだ、何うだ？』と牡丹餅で頬片をビタ／＼叩くやうにいふ。若し御遠慮なしのお相手だつたら随喜渴仰したであらうが、彼は先の先まで善く考へて、『この縁談は何處までも帳消にしやう』と決心して頑強に跳ね付けた。すると先方は善善見込を附けたものだと思えて、此方であつたれなく出れば出る程、向

ふは優しく附けつ纏ひつする。あかしいなと段段様子を搜つて見ると、娘が我れ故

◎戀の病

に罹つて居るといふ話。この事は彼に取つて最初の経騒であつたので、非常に心を動かされたと思えて、終に向ふの要求を容れることにした。すると間もなく立派な邸宅を新築して若夫婦を其處に住はせ、富の力で生活の状態が頓に貴族的に成つて來た。これを一面から見た時は、誠に結構なやうであつたが、他の一面から見た時は、彼が運命の發展はこれに依つて大いに阻害せられんとするのであつた。彼はその住み心地好き新居に移つて、

◎妖艶花の如き新婦

と同棲するやうに成ると、これまで音に聞えて居た程の勉強家も、俄にその活動的銳氣が鈍つて来て、君王これより朝を見ずと云ふ譯に成り、日日の出勤もホンの責ふさぎに止めて置いて、一刻も早く家に歸るのを喜ぶやうに成り、従來の丈夫的氣概はまるで無く成つて了つたので、外舅の方では大きに弱り、『實に飛んだ事をした！これぢや何かなしに娘と金とを以て彼の男を毒殺したやうなものだ』と云つて、太く後悔したといふ話を聞いた。この幸運兒否薄命兒の友の一人は彼に就いて語つて云ふ。『彼奴は實に出来る奴だつたが、餘り美人を細君にした爲に引込思案の男に成つて、沈香も焼かず屈もこなくなつて了つたが、

◎美女の魔力

といふ奴は實に怖ろしいものである』と。成程その人は今日でもまだ生きて居て、立派な生活はして居るやうだが、まだこれぞといふ仕事も成し得ず、謂はば外舅某氏の秘書としてお茶を濁して居るやうである。世に秀才などと謂はれる程の人物にしても、餘り早く金が出来て、好い住居が出来て、その上美人の細君が出来れば、それと共に活動的精神は直ちに麻痺して了ふものだといふ事は、彼に就いても明かに學ぶことが出来るのである。况や凡庸の青年者にして、餘りに早く幸運に遭遇し、金が出来て住み好い家屋が出来て、その上美妻にでも添ひ合はしたならば、彼の運命は最早其處に止まるであらう。金が出来て、住み好い家に美妻と毎日同棲することが出来れば、世の中に

◎これ以上の望はない

と云ふやうな人間ならばそれまでだが、苟くも我れは一個の人間として、大いに期する所ある青年は美人に對しては、餘り愛身はやつさぬが善いかも知れぬ。美人の妻君に就いて今一ツ、ほぼ前と同じやうな滑稽な話がある。日本橋邊の或る店舗に、中年者ではあるが非常に能く働く一人の店員があつた。彼は頗る商上手で、人物が確實で、而も働者と来て居るので、店主は太く氣に適つて、大いに彼を愛して居た。その中に最早嫁を貰ふ年頃に成つたので、一人の母が時々その店に遣つて来ては、その事を言ひ出して主人に相談を試みる。主人も彼には十分に見込があるので、『何うかまあ少しでも良い細君を貰つて遣つて、長く店に勤めさせたいものだ』といふ所から、一方ならず骨折つて、これな

らばといふ一人の

◎美しい生娘

を捜當て見合を爲せると異存のあるべき筈はない。彼は非常に喜んで恐れ入り、『何うか何分宜しくも願ひ申します』といふことに成つた。主人は此處ぞと骨を折り、萬事の費用は皆此方から祝つて遣つて婚禮の式を挙げさせた。何様新婦が非常な美形と来て居るので、新郎の喜び方と来ては實に恐れ入る位であつた。主人も大いに満足して、『これならば屹度益す奮發して、我が商店の爲に長く盡力するであらう』と心竊に樂みにして居ると、これも亦大いに當が外れて了つた。婚禮の翌日は無論も休み、その翌日もまだいらく取込があつて一日休んだのも無理は無いとして、その翌日も出勤しなかつた。主人の方では大目